



TOHOKU  
UNIVERSITY

2013

# 読書の年輪

— 研究と講義への案内 —



発行日: 2013年3月1日  
発行者: 東北大学 教養教育院  
〒980-8576 仙台市青葉区川内41 (川内キャンパス内)  
Tel: 022-795-4723 Fax: 022-795-7540  
<http://www.las.tohoku.ac.jp>  
e-mail: [info@las.tohoku.ac.jp](mailto:info@las.tohoku.ac.jp)

COPYRIGHT©TOHOKU UNIVERSITY ALL RIGHTS RESERVED.  
本冊子の記載記事・写真などを了承なく転載することはできません。



東北大学 教養教育院  
Institute of Liberal Arts and Sciences, Tohoku University



このフレートは「水なし印刷」  
により印刷しております。



環境にやさしい植物性インク  
「VEGETABLE OIL INK」で  
印刷しております。



# 2013 読書の年輪

— 研究と講義への案内 —

| 表紙の写真 |

東北大学史料館(片平キャンパス)。旧制東北帝国大学の中央図書館として、1924年(大正13年)に竣工。戦災を免れて1965年(昭和40年)までの本学の研究、教育を支えた。現在は、2階の旧学生閲覧室が本学の歴史資料の展示場となっている。

| 上の写真 |

東北大学百周年記念会館川内萩ホール(川内南キャンパス)。50周年で建造された記念講堂のデザインを可能な限り保存、修復し、第一線級のコンサート専用ホールと同等の非常に高度な環境のコンサートホールの要素を加味した国際会議場である。

# 読書の年輪

— 研究と講義への案内 —



## Contents

刊行にあたって	5
教養教育院長 花輪 公雄	
自分の夢を社会の夢に	6
—日本と世界の未来について考えよう—	
福西 浩	
すこし離れたところから眺めてみる	10
福地 肇	
若い頃の洋書との出会い	14
前 忠彦	
乱読の履歴	18
—そしてこれからの推薦本—	
工藤 昭彦	
学問とは何か?	22
—大学は何を目指すべきか—	
森田 康夫	
本との出会い	26
—今、君たちだったら—	
海老澤 丕道	
「大学時代でなくても、 できること」ではなく	30
柳父 園近	
学ぶ本・議論する本・楽しむ本・ 鼻歌まじりの本…出会った本	34
秋葉 征夫	
教育・研究の舞台裏	38
—私を支え・慰め・励ましてくれた本—	
海野 道郎	
本誌の書籍紹介一覧	42

## 刊行にあたって



読書は、私たちの知識の量を増やし、思考の幅を広げ、さらに疑似体験を通して考える力をつけてくれます。そして、ときには一冊の本から、生き方を学ぶこともあるとも言います。膨大な書籍の中から、一生手元に置きたいようなこれはという一冊の名著に出会うことは、この上もない素晴らしい体験で、喜びでもあります。

この小冊子「読書の年輪—研究と講義への案内—」は、本学教養教育院に所属する、教育と研究に高い実績を持つ経験豊かな本学名 教授である総長特命教授6名と、現在はその任を離れたOB3名の、計9名の先生方が、自らの講義やゼミの受講の際に有益となる本を、お一人6冊ずつ紹介したものです。どれもが定評のある選りすぐりの本と言えるでしょう。皆さんが、紹介された全54冊の本の中から、先生方の紹介文を参考に一冊でも多くの本を手にとってくださることを期待しております。

読書は豊かな心を作ります。皆さんが確かな教養を身に着けるためにも、日常的に読書に親しんでください。

2013年3月

東北大学教養教育院長  
花輪 公雄

# 自分の夢を社会の夢に

## — 日本と世界の未来について考えよう —



福西 浩 FUKUNISHI, Hiroshi

総長特命教授、東北大学名誉教授(大学院理学研究科)、理学博士  
専門分野:超高層物理学、宇宙空間物理学

基礎ゼミ:「未知への挑戦-南極観測から学ぶ」/「宇宙天気予報に挑戦しよう」

展開ゼミ:「惑星探査技術を学ぶ」

基幹科目:「雷放電から探る地球環境変動」

総合科目:「急成長する中国の科学技術と経済」/「オーロラから探る宇宙環境」

研究室:国際文化研究科東棟502号室 E-mail: hfukunishi@m.tohoku.ac.jp

私が中学1年生の1957年に世界初の人工衛星スプートニク1号の打ち上げがあり、南極に昭和基地が開設されるという出来事があった。これに刺激されて南極で宇宙空間の現象であるオーロラを研究することが自分の夢になった。東京大学に入学し、第1次南極観測隊長を務めた永田武教授の研究室で研究を始め、夢の実現に近づいた。そして大学院博士課程の時に南極観測隊に参加し、昭和基地でオーロラの越冬観測を行った。この観測結果を基にした博士論文が世界的に認められ、米国のベル研究所に2年間留学した。その後国立極地研究所に入り、南極観測事業の推進役として3度南極観測隊に参加し、越冬隊長や夏隊長も務めた。1986年に東北大学理学研究科に移り、南極・北極でのオーロラ研究に加えて、人工衛星を用いた宇宙空間と惑星の研究を新たに始めた。研究室では多数の大学院生がさまざまな研究に挑戦し、国際的にインパクトのある素晴らしい研究成果を上げて築き上げて行った。

こうした経験から、大学は学生たちの夢を実現する場でなければならないと確信するようになった。東北大学が目指す「研究第一主義」による教育も、学生と教員が一体となった世界レベルの研究チームが創り出されることが前提だ。大学院の学生た

ちはこうした研究チームに参加することによって新しい研究領域に挑戦する意欲が掻き立てられる。しかし学部の学生たちは研究チームの一員となる以前の段階なので、別のやり方で知的好奇心を高める必要がある。

高校までの学びは受験勉強中心なので、いかに効率的に学習するかに焦点を当て、文系・理系別の受験科目に絞った学習が当たり前になっている。しかし現在のグローバル化した社会で活躍するには特定の分野の知識だけでは全く役に立たず、分野横断的なコラボレーション能力やコミュニケーション能力が必須となる。それを身につけるにはまず教養教育で知的好奇心を高め、いろいろな分野に興味をもち、視野を広げていく必要がある。インターネットは広範囲な知識を瞬時に得るという点では優れているが、視野を広げるという点では読書の方がはるかに優れている。一冊の本をじっくり読むことによって、著者の視点や考え方が分かり、「自分だったらどう考えるか」と思索を巡らすことができる。大学の学びの最初の段階で最も重要なことは他人の考えの受け売りではなく、自分流の考え方を確立していくことだ。ここで紹介する6冊の本をとおして自分の夢を社会の夢に高める道について考えてみよう。



トクヴィル 著

### アメリカのデモクラシー (第1巻上・下、第2巻上・下)

松本 礼二 訳、岩波文庫、第1巻2005年、第2巻2008年

日本は戦後アメリカの指導によってアメリカ流「デモクラシー」の国に変貌し、歴代首相は世界とアジアの安定のために日米関係が最も重要だと言いつつ続けた。しかしアメリカ流「デモクラシー」の本質をきちんとと言える日本人はあまりいない。



クロード・レヴィ=ストロース 著

### 野生の思考

大橋 保夫 訳、みすず書房、2006年

1960年代、日本では多くの学生がマルクス主義や実存主義に魅せられ、学生運動が盛んであった。しかし1970年代に入り社会主義国の経済は行き詰まり、社会主義国家を理想とする学生運動は急速に衰退していった。マルクス主義や実存主義に代わっ

1831年、フランスからやって来た25歳のアレクシ・ド・トクヴィルが271日間でアメリカ各地を巡っただけで、その旅から得られた情報を基にデモクラシーの本質を鋭く浮かび上がらせる歴史的名著を書き上げた。

地域の自治を基本にした民主制、州と連邦の関係、大統領制、選挙の仕組み、宗教と政治の関係、なぜ市民の集団的な力の方が国家の権威よりも社会の福利をもたらす力が強いのかなど、民主主義の良いところと悪いところを詳細に分析した。個人同様、国民もその生涯の主要な特徴は若い時分から現れると考え、当時は数百万人しか住んでいなかった北アメリカに、将来はヨーロッパ全土に匹敵する1億5000万人もの互いに平等な人間が住み、世界第一の海洋大国になるだろうと予言し、見事に的中させた。著者の鋭い分析法は私たちが今日、デモクラシーの本質を理解し、日本と世界の未来を考える上できわめて有用である。

て登場したのが構造主義で、その基礎を創ったのがレヴィ=ストロースである。

本書は、歴史には「鉄の必然性」をもって貫徹する発展法則があるとし、「未開人」と「文明人」を区別する西洋中心主義のパラダイムを一変させた歴史的書物である。未開社会の「野生の思考」と「近代科学の思考」が同じように合理的な科学的思考であるとし、野生の思考こそが人類に普遍的な思考であることを「トテムの分類」や「プリコラージュ(器用仕事)」などの諸事例に共通する構造を抽出することによって示した。

ここで用いられる「構造」という言葉は「要素間の関係」を示し、この関係は「変換」を通して不変であるものと定義される。構造主義での変換の概念は数学の射影変換や位相変換に対応しており、自然や社会の複雑な事象から変換を通して不変な構造を取り出す思考方法は、日本と世界の未来を考える上できわめて有効な手段となる。



■ 中沢 新一 著  
野生の科学  
講談社、2012年

著者はレヴィ=ストロースの「野生の思考」に触発され、人間諸科学の「野生化」を大きなテーマとしている。本書では、神話の世界の動物と人間の間を読み解くレヴィ=ストロースの神話の公式が「ねじれ」を含んだ仕組みを通して「敵を味方に

変える」働きをしていることを示し、この公式が人間と自然のさまざまな関係を読み解く上できわめて有効であることを示す。また現代数学の位相幾何学（トポロジー）がこの公式に対応しており、トポロジー的思考法が広い応用範囲をもつことを示す。例えば、アニミズム、多神教、一神教の関係などがトポロジーによって分かりやすく解釈できる。

著者はまた、現在の経済学は市場での等価交換を絶対化し、GDP で豊かさを測っているが、GDP では計算できない生活の質的豊かさを経済に取り入れるには「贈与」の思想を取り入れた新しい経済学の創造が必要だと主張する。その創造にトポロジー的思考法が必要不可欠であることも示される。行き過ぎた市場経済が原発の安全神話を生み出し、原発事故につながったことから、近代科学を絶対化せず、何が足りないのかを真剣に考えることが今、求められている。



■ 内田 樹 著  
日本边境論  
新潮新書、2009年

明治維新、戦後復興と二度の奇跡をやり遂げた日本人が3.11東日本大震災後の日本新生をやり遂げるには、まず日本や世界が抱える諸問題について一人ひとりが自分の頭で考えていくことが必要だ。その際に参考になるのが本書である。著者の専門

はフランス現代思想だが、武道家でもあり、さまざまなジャンルの著書があり、ユニークな論理を展開している。

本書で著者は、常にどこかに「世界の中心」を必要とする边境の民が日本人であり、日本人固有の思考や行動は世界から見ればかなり特殊であると述べる。「世界標準からこんなに遅れている」と言われると日本人は必死になって「キャッチアップ」しようとするが、「国際社会はこれからどうあるべきか」という種類の問題になるとたんに口をつぐんでしまう。

しかし边境人の優れた才能として著者は学びの効率がよいことを指摘する。学びは学んだ後になってはじめて学んだことの意味や有用性について語れるようになる。そこで外来の知見に無防備に身を拡げることが多くの利益をもたらすことを日本人は歴史的経験から習得しており、「学び力」こそ日本の最大の国力であると著者は主張する。



■ マッキンゼー・アンド・カンパニー責任編集/クレイ・チャンドラー/エアン・ショー/フライアン・ソースバーク編  
日本の未来について話そう  
—日本再生への提言—  
小学館、2011年

2011年3月11日に発生した東日本大震災は東北地方沿岸部に壊滅的な被害をもたらし、福島第一原子力発電所の事故はこれまでの日本社会の伝統的な価値観への見直しを迫っている。この転換点において、様々なジャンルで活躍する国内外の著名

人64名が本書で、社会、文化、経済、政治、教育などについて多面的に日本の強みと弱みの検証を行う。日本の未来と自分自身の歩むべき道を考える際に大きなヒントを与えてくれる。

日本の若者は内向き志向を強めているが、グローバル化の進む世界の中で日本だけが鎖国化に進むことは不可能だ。日本の社会がもつ同質性は地域社会の安定のためには強みになっても、グローバルな競争・共生の社会の中では多様性（ダイバーシティ）の欠如は斬新なアイデアを生まれにくくし、逆に弱みになってしまう。今こそ日本の社会は世界とのつながりを強め、多様性を受け入れる社会に変身する必要がある。

本書は一人ひとりが多様性に価値を見出すことの大切さを様々な立場から語ってくれる。そして東日本大震災からの単なる復興ではなく、日本が世界の持続可能な発展に貢献できる国になるためには今何をすべきかを気づかせてくれる。



■ ヘンリー・A・キッシンジャー 著  
キッシンジャー回想録 中国(上・下)  
塚越 敏彦/松下 文男/横山 司/岩瀬 彰/中川 潔 訳、  
岩波書店、2012年

尖閣諸島をめぐる対立によって日中関係の将来が心配されているが、現在日本の貿易相手国は輸出とも中国が全体の20%ほどを占めて第1位になっており、日中はすでに一体化した経済圏を形成している。また2008年に戦略的互惠関係の推進に関す

る日中共同声明が出され、友好関係を発展させる基盤はでき上がっている。私は2007年に日本学術振興会が開設した北京センターの初代所長として4年間北京に滞在し、日中学术交流を推進する仕事をしてきたが、教育と科学技術に関する両国の交流も急速に発展している。

著者のキッシンジャー博士は1972年のニクソン訪中による米中国交回復の実現のために活躍した人物として歴史に名を残しているが、本書では世界の人物をあつと言わせたこの出来事が「地政学的な発想」と中国の歴史と中国人の考え方を深く理解することによって初めて実現したことを詳しく解説してくれる。私たちは表面的な米中対立に目を奪われがちであるが、キッシンジャー博士は本書の中で、「これからの米中関係を適切に表現すれば、それは協力関係というよりも『相互進化』であろう」と述べている。「相互進化」はこれからの日中関係においても強く求められる。

## すこし離れたところから眺めてみる



福地 肇 FUKUCHI, Hajime

総長特命教授、東北大学名誉教授(大学院情報科学研究科)文学博士  
専門分野:英語学、機能言語学

基礎ゼミ

基礎ゼミ:「ことば」の世界に迷い込んでみませんか」

共通科目:「英語A1」/「英語A2」/「英語B1」/「英語B2」/「英語C1」/「英語C2」

研究室:国際文化研究科棟512号室 E-mail:fukuchi@m.tohoku.ac.jp

私は、昭和50年に東北大学に赴任し、平成24年に定年退職しましたが、その間37年、川内キャンパスで1、2年生のための英語の授業を担当してきました。学部や大学院で専門とする英語学や言語学の指導もしましたが、教養(一般)教育の英語の教室で、入学して間もないフレッシュな学生の皆さんに楽しく接してきたことが、英語教師としての私の大きな、そして大事な部分を占めています。

外国語の教室の風景は、昔と今とではかなり変わってきたように見えますが、本質的なところではあまり違いはありません。教材を読み、書き、聴き取り、話すといった基本的な作業が中心となります。紙の辞書から電子辞書に移ったことが以前との目立った違いでしょうか。

このような外国語(英語)の学習に直接参考になる本は無数にあるでしょうが、今回は別の観点から紹介します。教室の内外で意識的に外国語の勉強をしているうちに、「これは何となくおもしろい言い方だ」「日本語ならどう言ったらぴたりするだろう」「(人間の)ことばって不思議な(あるいは不合理的な)ものだ」という思いを抱くことがあると思います。これは、外国語という、いま勉強している対象を、少しでも離れたところから眺め直した時に感じるものかもしれません。私は本年「ことばの世界

に迷い込んでみませんか」という題目の基礎ゼミを担当しましたが、これは、特に外国語の学習のためではなく、素直な気持ちで身近にあることばを眺めてみようという趣旨です。しかし、そこで何かを見つけたら、外国語に対する新しい見方ができるようになる可能性があります。

このような姿勢は、何も外国語の学習だけにあてはまるものではありません。「どんな学問分野に進むにせよ、その研究分野の歴史をまず勉強しなければならぬ」という言葉を聞いたことがあります。要するにいきなり作業にはいるのではなく、全体が見えるところから眺めてみる、ということでしょう。私は、自分の専門の勉強をしているときにも、どちらかというと「その周辺」にあることがむしろ気になる性質でした。その周辺から自分の論文の対象となっている事象を眺めることが多かったといえます。

以下で紹介する6冊は、少しわき道によって、ことばとその周辺にあるものを考えながら外国語の学習を続けていったらどうだろうというつもりで選んだものです。



岩波書店編集部 編

英語とわたし

岩波新書、2000年(品切重版未定)

英語の参考書は無数にあり、さまざまな角度から英語に関して論じた書籍も数え切れないほど、私たちにとって英語は大きな関心事である。英語を使うようになりたいと多くの人が願いながら、挫折を味わうというも現実である。



中村 保男 著

翻訳の秘訣：理論と実践

新潮選書、1982年(絶版重版未定)

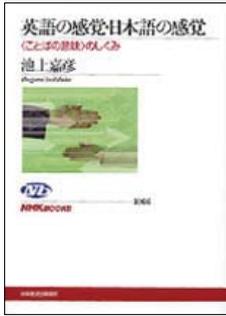
『翻訳』に関して書かれたものの中には達人による自慢話や苦労話、失敗談になっているものが少なくないが、本書はそのようなところは一切なく、副題からわかるように、翻訳の本質について述べるとともに、翻訳の実際の作業をできるだけ体系的に

本書は、各界で活躍している23人の体験的英語論である。政治家、学者、ジャーナリスト、ビジネスマン、スポーツ選手、音楽家など、さまざまな分野の人が仕事をする中で英語とどのように関わって(あるいは格闘して)きたかを淡々と話している。この中にはもちろん英語の達人もいるのだが、英語を専門的に勉強してきた人はいない。みな、日本の学校で教育を受け、あくまでもそれぞれの仕事のなかで英語を勉強してそれを使っている人たちである。また、英語をどのように学びどのように使っているかだけでなく、優れた仕事をする人たちが国際共通語である英語を(あるいはそれを使うこと)をどう考えているのかもわかる。皆が皆、英語を使うことを無批判に肯定しているわけではない。なかには皆が英語に向いている現状に少し立ち止まってみることも必要だという人もいて、面白く参考になる。

整理し、翻訳を通して日本語の表現力・表現力を身に付ける方向を目指している。

ふだん外国語の学習をしている学生の皆さんにとっては、『翻訳』とは極めて特殊な専門的な作業であると思うかもしれない。実際そういう面はあるが、本書は、中学校・高校で英語の基礎を学んだ人の語学的な知識を前提として、英文和訳・英文解釈を卒業して翻訳にいたる道筋を教えてください。つまり、外国語学習の一つの行き着く先が優れた翻訳であるという視点から、著者の示す道筋は、見えないところで言語学的な基盤と根拠に基づいている。たとえば、著者は「日本語・英語間の語順の違いは文法の違いによるものでいたしかたがないが、『節』順は両者ともに基本的に変わらない」というが、これは機能言語学の基礎でもある。

自分の持つ外国語力をさらに伸ばしたい方には一読をお勧めする。



池上 嘉彦 著  
英語の感覚・日本語の感覚：  
〈ことばの意味〉のしくみ

NHKブックス、2006年

外国語という科目の中で具体的に学ぶものは、外国語の発音であり文法であり単語（語彙）である。それを学び知った後に、読む、聞く、話す、書く、といった実的な技能を身に付けることが外国語学習の目的である。しかし、文法に適った文の形

を作り適切な語彙をそこにはめ込み、それを正しく発音しても適切な言語コミュニケーションになるわけではないことは、私たちが日常感じているところである。

本書は、文法と（辞書があたえる）意味のできた文の骨格にどのような肉付けをすることによって「自然な」（英語らしさ、日本語らしさ、など）表現ができるのかを、系統的に考察したものである。たとえば、同じことを言うのに、「（私には）星が見える」（自動詞型）というのが日本語的であるのに、英語では「私は星を見る」（他動詞方）という言い方が普通である。このようなことは英語の教室で先生が何かの機会に話をしてくれるのだが、本書では、文法書や辞書だけではわからない言語表現の豊かさを、言語学の視点から論じたものである。

「ことばにこだわる」方面には何かの参考になると思う。



鈴木 孝夫 著  
ことばと文化

岩波新書、1973年

言葉が違えば文化も違う、というのはいわばあたりまえのことで、決してめずらしい見かたではないが、どのように、と訊かれると困ることがある。ことばが人間の思考や文化の形態を決める、というのが言語相対論という言語観であるが、どの程度決

定するのかによって、弱い仮説と強い仮説がある。

こういう議論をするときによく出される例や話題は、日本の幼児は太陽を書かせる赤いフレヨンを使うが、黄色を使う国もある、とか、ピーターパンの挿絵に出てくるワニは緑色である、という他愛のないものもある。

本書の中心的内容となっている日本語の呼称体系は、ことばがいかに日本人の人間関係の形成に関わっているかを知るうえで考えさせられる。親は子を固有名詞や代名詞で呼び、子は親をお父さん・お母さんと普通名詞で呼ぶ、子に対して親は自分のことを普通名詞で呼び、子は代名詞を用いる。小学校低学年担当の先生も自分を普通名詞で指すことがある。また、職場の上司は部下を固有名詞で呼ぶが、部下は上司を課長などの普通名詞で呼ぶ、など、いわば整然とした体系をなしていると思われる。ことばが文化的基盤の形成にどうかかわっているか、その様子がよくわかる。



井上 ひさし 著  
日本語教室

新潮新書、2011年

2010年に惜まれて世を去った著者は、すぐれた小説や戯曲を数多く残しただけでなく、日本語について深い見識をもった作家として知られる。「私家版日本語文法」「自家製文章読本」のようなタイトルの日本語論が数多く、言語学者や日本語学者が思

いもつかない現象に目を向ける鋭い観察眼の持ち主である。新聞の不動産広告に見られる最小の字数で最大の情報を伝える手法の分析など、あっと驚くセンスがある。

本書は、これまでの身の回りの気がつきにくいことばの現象を論じるよりは、もう少し言語を正面から見据えて日本語のすがたを論じたものである。しかし、講演の記録をもとにしたということもあり、決して堅苦しいものではなく、「レモンティー」ではなく「レモンデー」が正しい、というような例を出して日本語の音韻の特徴をさりげなく教えてくれる。

しかし、この本から読者が感じる最大のものは、日本語にたいする著者のやさしい眼差しであろう。「ことばの乱れはいつの世にもある」「ことばとは精神そのもの」「グローバリゼーションは危険だ」などという言い方から、日本人が大事にすべきことばに対する、著者の限りない愛情を感じる。



中西 進 著  
日本の文化構造

岩波書店、2010年

タイトル通りの内容であり、タイトル通りの堅い本である。今回紹介した6冊の本のなかでは一番高度な内容になると思うが、それほど難解というわけではない。講演や学術誌に載せた論文を収集編集したもので、体系立てて書かれたものではなく、そ

の点では気楽に読めるとも言える。

著者は高名な万葉学者であり、縄文の時代にさかのぼって現在までの日本文化を特徴づける話題を拾って論じているが、それを通して日本文化と他の文化のパターンの違いに目を向けているように思う。たとえば、日本の建物をふくめた構築物は平面的に広がるパターンがあるのに対し、西洋のそれは垂直に伸びようとするパターンがある、という指摘がある。代表的な建築、たとえば野山を借景とする寝殿造りと、何百年もかけて完成されるゴシックの大聖堂を思い浮かべればすぐに実感することであるが、無秩序に広がる日本の団地と、2本の道路が交差するだけで出来上がり番地の付け方まで決まるアメリカ西部の小さな町にまで話題が広がる。

英語教師の私は、ここから、節を並列させたがる日本語と節を積み上げたがる英語の文（節）の構成パターンの違いを想う。

## 若い頃の洋書との出会い



前 忠彦 MAE, Tadahiko

総長特命教授、東北大学名誉教授(大学院農学研究科)、農学博士  
専門分野:植物栄養生理学(作物の生産性に関わる生理・生化学、栄養学)

基礎ゼミ:「植物の独立栄養性を検証する」/「ヒトの暮らし・文化と植物の多様な関わり」  
基幹科目:「地球の命を支える“光合成”をひもとく」  
総合科目:「植物面白考—巧みな生存戦略と私達の暮らし」

研究室:国際文化研究科西棟507号室 E-mail:hmae@m.tohoku.ac.jp

私はこれまで、植物栄養学、光合成、作物の生産性に関わる生理・生化学等について、研究と教育を行ってきた。ここでは、若い頃の洋書との出会いについて述べたいと思う。

学部時代、運動部で部活動中心の生活を送っていた私は4年で卒業して社会に出るには心もとなく、大学院に進んで勉学しなおすこととした。

私が大学院生となった1960年代後半は生化学の研究が盛んで、私が所属した研究室では米国から帰国後間もない助教授を中心に、植物のアミノ酸に関する研究が活発に行われており、私の研究もその流れに沿うものであった。

当時、最新の科学情報は、今のようにコンピューターを操作することで瞬時に手に入るのとは違い、発行後数ヶ月遅れでやっと届く外国雑誌に拠っていた。また、最近の情報を盛り込んだ広範な知見を得ようとする場合は、外国の教科書・専門書を手に入れるしかなかった。当時は、洋書を扱う本屋が定期的に研究室を訪れ注文をとっていく時代で、1ドル360円だったことに加え、定価に高額の郵送料、手数料が上乗せされてさらに高いものとなった。よって洋書は、院生にとって一大決心をしないと購入できないものであった。自分自身で初めて選んで購入した洋書は、『Dynamic Aspects of

Biochemistry』(Baldwin、1967)と題する青い表紙の本だった。それを初めて手にした時の気持ちの高ぶりが今でも懐かしい。研究者になることを決心した証しでもあった。

大学院の修了を機に研究の幅を広げようと留学を決意した。自分の研究に行き詰まりを感じていたからである。幸い、オランダのワーゲニンゲンの植物生理中央研究所が博士研究員として迎えてくれることになった。オランダに渡り、街の本屋にいったら驚いた。私の欲しい本が、信じられないような手頃な値段で並んでいた。滞りした街は小さいながらも、オランダ唯一の農科大学に加え国の農業研究機関のほとんどが集結しているという環境にあったため、店頭にはヨーロッパはもちろん、米国からの本も豊富にあった。うれしくて多くの本を購入した。おかげで留学期間中に植物科学の幅広い分野について多くを学ぶことができた。このときの経験が、私のその後の研究に対して広い視野と興行きを与えてくれたと思っている。

学生諸君に伝えたい。“ここぞと思うときに集中して学ぶ!それはのちにきつと大きな力となる”。

以下には、私の担当している講義に関連した本を紹介する。



葛西 奈津子 著  
植物が地球をかえた!

植物まるかじり叢書①、(株)化学同人、2007年

わたし達をはじめとする動物は、“植物”によって生かされている。しかし、わたし達は、生き物としての植物をどれだけ理解しているだろうか?

「植物まるかじり叢書」は、生きものとしての植物の営みを最新の知見を交えて紹介するとともに、こ



丸山 茂徳/磯崎 行雄 著  
生命と地球の歴史

岩波新書、1998年

地球の歴史は46億年、生命の歴史は40億年に及ぶ。この間、生命はいかなる進化を遂げ、地球はどのように変動し、それら進化と変動の要因はどのように説明されるだろうか? 本書は、このような疑問に真っ直ぐに答えてくれる。「生命の進化史」を著者ら

うした植物を研究している人たちがどんなことを考えているのかを合わせて紹介しようと日本の植物生理学会が中心となって企画した全5巻のシリーズものである。高校生、大学1・2年生、一般向けとしながらも学問的な内容は植物科学の第一線の息吹が感じられる本を目指し書かれている。

その第一巻が本書で、植物の大切な働きの一つ、光合成を中心にまとめたものである。植物の行っている光合成はわたしたちの食糧だけでなく、地球環境の形成や維持にも大きく関わっている。

サイエンスライターである葛西奈津子氏が、8人の光合成に関わる研究者にインタビューして、それぞれの内容を章ごとにまとめている。著者が内容を分かりやすく紹介しているとともに、それぞれの研究者の研究に対する考え方や取り組む姿勢が丁寧に紹介されていてそれだけでも興味深い本となっている。光合成の営みやその研究の面白さを知るのに格好の本である。

独自の「固体地球の進歩史」という大きな視点からとらえ解説している。

主な内容は、地球と生命の歴史の中の七大事件、地球の変動原理、生命の誕生から原核生物までの初期生命の歴史、酸素発生型光合成の開始から5.5億年前の硬骨格生物出現までの生命発展の歴史、生物の大量絶滅と新種の出現が繰り返された5.5億年前から今日までの歴史、大気・海洋・地殻の歴史、地球のテクトニクス、マントルと核の歴史、そして生命と地球の共進化についてである。

本書を読むと、地球の表層環境とそこに生きる生命体とその歴史を通して固体地球あるいは宇宙の変動にいかにか大きく左右されてきたかがひしひしと伝わってくる。東日本大震災を経験した直後故に、そのインパクトは強烈である。わたしたちの自然に対する向き合い方を深く考えさせてくれる内容で、皆に読んでもらいたい本である。



園池 公毅 著  
**光合成とはなにか**  
 —生命システムを支える力—  
 ブルーバックスB-1612、講談社、2008年

「光合成」と言えば「植物が光によって葉でデンプンをつくる反応」と小学校で習って以来、誰もが知っている。しかし、一步踏み込んで「光合成のしくみは？」と正面きって問われると、多くのヒトが答えるのが怪しくなってしまう。

地球環境の保全、食糧問題、エネルギー問題等が日常的に話題となる時勢である。これらの問題に「光合成」が深く関わるとなれば、さらにその理解を深めておくことが現代人にとって必要なことであろう。

「光合成」を解説する本はいくつかあるが、そのほとんどは複数の著者によって書かれたものである。そのたぐいの本は、個々の項目の理解にはよいが項目間の関連を掴みにくいの欠点である。光合成を全体的・網羅的に理解するのに手頃な本が案外少ない。

そんな中で、文庫本サイズに「光合成」の重要な項目をバランスよくまとめ、読みやすい文体で一人の著者により書かれているのが本書である。全体を通して一貫した見方・考え方で説明されていて、入り組んだ生理反応の相互関係も理解しやすい。内容には最新の情報まで組み込まれており、光合成のほぼ全分野を網羅している。「光合成の全体像」をつかむのには適した本として推奨したい。



デービッド・アッテンボロー 著  
**植物の私生活**  
 門田 祐一 監訳、手塚 勲/小堀 民恵 訳、山と溪谷社、1998年

自然をテーマにしたドキュメンタリーの第一人者として知られるデービッド・アッテンボローが、植物たちの秘密と謎に満ちた驚きの生活を、多くの美しい写真に分かり易い説明文を添えて、世に送り出した名著である。

熱帯雨林、砂漠そして極地等で暮らす植物のさまざまな生き方を3年の月日を費やし追跡している。写真を見ただけでもわたし達の知らない植物のたくましさ、強さ、そのしたたかな生存戦略を知ることができる。

全体は6章からなり、第1章では植物が子孫を増やし縄張りを拡大していく戦略、第2章では養分の多様な調達方法、第3章では花粉輸送の作戦、第4章では環境変化の中での生き残り戦略、第5章では植物とさまざまな生物とのパートナーシップ（共生）、そして第6章では南極、北極、高山、砂漠等の極限の世界でのサバイバル戦略が紹介されている。

本書を読むと、太古からの様々な試練を乗り越えて適応・進化し今日まで命をつないできた植物のすごさが伝わってくる。植物に対するわたし達の一般的なイメージを大きく変えさせる内容と迫力をあわせ持った本である。一息入れたいときに手にとるにふさわしい楽しい本でもある。



東京大学光合成教育研究会 編  
**光合成の科学**  
 東京大学出版会、2007年

理系ばかりでなく文系の学生や社会人にも興味を持って読んでもらえるように、との編集方針のもとにつくられた「光合成」の解説書である。また、関連事項についてちょっと調べたい時などに便利な本でもある。

これまでの教科書は、光合成のメカニズムの解説を中心としたものが多かったが、本書は、そればかりではなく、近年のゲノム研究や遺伝子操作による新しい展開、環境や生態における光合成の意義、食糧との関わり、地球の歴史の中で光合成が果たしてきた役割など、光合成が生命科学・地球科学・社会に与える意義等についても幅広く解説している。

内容は、1. 光合成について考えてみよう、2. 生命世界は光合成が作り上げた、3. 多様な光合成生物の姿、4. 光合成を支える細胞構造、5. 光りをとらえて利用するしくみ、6. 光合成膜で起きるはじめの反応、7. 植物の体を作るための物質同化反応、8. 光合成を助けるしくみ、9. 葉緑体を機能させるための遺伝子、10. 葉緑体をつくり増やすしくみ、11. 環境に適応するしくみ、12. 光合成生物の進化とゲノム科学、13. 光合成は生命世界を作り続けるとなっている。

幅広く光合成を学びたい人にお薦めの本である。



L・T・エヴァンス 著  
**100億人への食糧**  
 —人口増加と食糧生産の知恵—  
 日向 康吉 訳、学会出版センター、2006年

世界人口は、2011年11月に70億人を突破した。そしてその増加は今後も続き、2050年には100億人に達するとも予想されている。

はたしてこの地球は、増え続ける世界人口を将来も養うことができるのだろうか？予想される食糧危機

は、環境、生物多様性、教育、政治、経済等多くの問題と関わっており、世界が知恵を寄せ合って解決しなければならない問題である。

本書は、農学者として世界によく知られるロイド・エヴァンスによるもので、1-10章では、人類の出現から今日までの世界人口の変遷と作物生産に関わる技術、科学の発展、食糧供給の関係を、時代を追って説明している。11章では、現在世界では何を食べているのか、そして著者の強い思いが込められた最終章では、100億人への食糧供給への具体的な戦略の提示とその実現に際しての問題点が述べられている。

古今東西の人文科学から自然科学、社会科学と幅広い分野の膨大な情報をもとに、多様な観点からの論議が展開されている。その圧倒的な知識には驚嘆させられる。世界の農業史、農業技術史としても興味深い内容である。

## 乱読の履歴 —そしてこれからの推薦本—



工藤 昭彦 KUDO, Akihiko

総長特命教授、東北大学名誉教授(大学院農学研究科)、農学博士  
専門分野:農業経済学

**基礎ゼミ:**「農」的世界の可能性—ポスト工業化社会の課題／「現代世界の「食」—飽食と飢餓の構造」  
**基幹科目:**「資本主義と農業—世界恐慌・ファシズム体制・農業問題—」  
**総合科目:**「時代の文脈からみた「食」と「農」／「環境と経済社会の調和に関する多様なアプローチ」

研究室:国際文化研究科西棟307号室 E-mail:akihiko@bios.tohoku.ac.jp

読書は嫌いな方ではなかった。かと云って、年輪を語るほどの記憶はない。系統立てて読むというよりは、乱読であった。中学時代は何と云ってもヘルマンヘッセ。確か夏衣裳の少女のことを謳った詩の一節を、奥座敷の縁側で語っていたものだ。けたたましいセミの鳴き声を聞くと、今でもかけろうのよう光景が時折甦る。青春であった。

往復4時間以上の高校通いが始まると、冬など真っ暗なうちに家を出た。ある日、担任の先生から「図書館の貸出は君が一番多いね」と云われたことがある。相変わらず乱読が続いていた。後で分かったが、先生は密かに小説を書いていたようだ。

この頃は対人恐怖症に悩んでいたこともあり、読書の記憶も楽しい思い出もあまりない。強いて言えば、太宰の『斜陽』ぐらいか。元華族の落ちぶれていく様が、明治生まれの気丈夫な祖母から聞かされた我が家の歴史と重なって、妙に生々しかった。ただ、太宰は最後まで好きにならなかった。

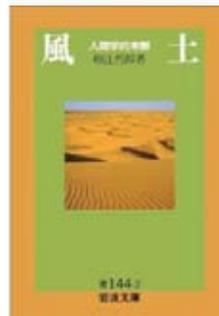
入学の儀式が終わり、米軍が置き去りにした蒲鉾校舎が残る川内で始まった教育部暮しは、気怠かった。4年間続ける羽目になった乗馬部も、ある先輩の強引な客引きに逆らう勇気が無かっただけで、自ら入部を決断した訳ではない。不思議なことに自分から止めようとは思わなかった。

馬が取り結ぶ人間集団の生態は、書物の世界とは違うリアリティがあった。同じ釜の飯を喰ううちに、いつの間にか対人恐怖症からも解放されていた。『風とともに去りぬ』など超娯楽本は別として、それまでの乱読は、しばし眠りについた。

目覚まし時計のベルを激しくかき鳴らしたのは、全国に吹き乱れる学園紛争の嵐であった。皆が脅迫観念に取り憑かれたように活字を貪り、激論を戦わした。マルクスの資本論、ヘーゲルの大論理学、精神現象学などが突如として必読書になったのだからたまらない。読まない会話についていけない気がした。考えてみれば、意味不明の乱読であった。

ただ、もう一度じっくり読んでみたいのは、マルタン・デュ・ガールの『チボー家の人々』。白水社から山内義雄訳の5巻本が出ていて、これだけはまだ手元に残っている。第一次世界大戦前後の戦争と革命の嵐が吹き荒れるヨーロッパを舞台に、フランス生まれの主人公ジャックと彼を取り巻く人々の生き様を描いた壮大な歴史ドラマだ。

次ページからは、私の講義や基礎ゼミに関連して、これを読んでもらおうと嬉しいと思う本を6冊ほど紹介した。中には絶版本もあるが、図書館には数冊あるし、ネットで古本もまだ手に入る。参考にしたい欲しい。



和辻 哲郎 著  
**風土 一人間学的考察—**  
1935年、岩波文庫、1991年

本書が刊行されたのは、戦前の1935年。間もなく80年近くに近らんとするのに、新たな読者を獲得しながら読み継がれている。環境の世紀を迎え、改めて人間と自然の折り合いのつけ方が問われているからだろう。1991年に若干体裁を整えて再発



大内 力 著  
**農業の基本価値**  
創森社、1990年

農業問題はかつて農民や農村の絶望的な貧困問題であった。大内氏は処女作『日本資本主義の農業問題』(日本評論社、1948年、毎日出版文化賞受賞)以来、90才で逝去されるまで、積み上げれば身の丈の2倍にも及ぶほどの著書を世に出したという。

行された本書は、2009年に5刷りが出るほど静かなブームを呼んでいる。

たやすく読める本ではない。ハイデッカーの『有と時間』を批判的に継承し、人間存在の構造を時間と空間が織りなす風土としてとらえる哲学の書でもあるからだ。

特殊な風土は人間存在の特殊な構造でもある。こうした視点から著者は、モンスーンアジアは「受容的・忍従的」、砂漠地域は「实际的・意志的」、牧場的ヨーロッパは「理性的・合理的」といった人間類型の特質を鮮やかに浮き彫りにしてみせた。しばしば誤解されるように、風土が人間類型を規定しているという意味ではない。人間類型もまた風土なのだ。

従って、風土にしる人間類型にしる、共に変わりと考えていいだろう。グローバル化の嵐が吹き荒れる中、風土を支えてきた屋台骨も激しくぐらついているからだ。どんな風土創りを目指すのか。まずは本書を手にして格闘してみたい。

緻密な論理が持ち味の氏の業績の中で、異色を放っているのが本書である。「食糧の安定的供給」、「自然環境の保全」など農業が有する四つの基本的価値について力説し、農業壊滅路線の選択は日本を「無農国」にするばかりか、「無能国」になると警告している。農業の環境保全機能を重視することは、地球環境保全との関連でも注視されるべきだともいっている。

グローバル化の嵐に身を委ね、ただ単に自由貿易とりわけ農産物など一次産品の貿易を拡大していくことは、輸出国にとっても輸入国にとっても破壊的意味を持つという指摘など、自由貿易の一方的な拡大を目指す TPP (環太平洋経済協定) への参加がマスコミを賑わしている時だけに、改めて注目されてよい。

第一級の経済学者が珍しく情念を交えながら発した警告は、出版から20年以上経ったいまなお、鮮度が失われていない。



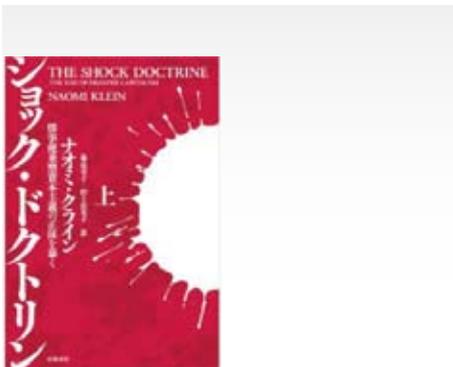
ジョセフ・E・スティグリッツ 著  
世界を不幸にしたグローバリズムの正体  
鈴木 主悦 訳、徳間書店、2002年

反グローバリズムの本だと思われがちだが、そうではない。原題は「Globalization and Its Discontents」。グローバリゼーションそのものというよりは、それを推進してきたIMF、世界銀行、WTOなど国際機関側に問題があるというのが著

者の立場だ。規制緩和、自由貿易こそ全ての人々の利益になるという信仰にも似た硬直的な思考パターンが、アジア通貨危機への対応のまずさなど、多くの災いを招いてきたからだという。

ビル・クリントン大統領の経済諮問委員会委員長、世界銀行のチーフエコノミストなどを歴任してきただけに、分析はリアルで分かり易い。著者が目指すのは「人間の顔をしたグローバリゼーション」へのチャレンジ。途上国の人びと、破壊が進む自然環境や農業など、疎外されがちな領域に対する眼差は優しい。

もともと著者は「情報の非対象性理論」で2001年にノーベル経済学賞を受賞した数理経済学者。そういう著者をして、数式を一切使わない本書を書かせしめたのは、独立したばかりのケニアでの大学教員経験や世界銀行時代のアジア通貨危機だろう。海図なき航海の時代、本書には羅針盤となるような指摘が随所に<sup>ちりば</sup>鑲められている。



ナオミ・クライン 著  
ショック・ドクトリン (上・下)  
— 惨事便乗型資本主義の正体を暴く —  
幾島 幸子/村上 由見子 訳、岩波書店、2011年

3. 11の大災害に見舞われた東北そして日本にとって、本書に込められた警告は他人事ではない。社会を危機に陥れる壊滅的な出来事を利用して巨万の富を得る「惨事便乗型資本主義」の生々しい実態が、臨場感溢れる筆致で綴られているからだ。

著者クラインは、上下2巻、700ページを超える力作で、精力的取材活動や膨大な文献考証によりながら、1970年代のチリの軍事クーデターから9. 11のアメリカ社会やイラク戦争など、広範な現代史の出来事を分析の俎上に乗せている。そこで暴かれるのは、自由と民主主義という美名のもとに推進された急進的自由市場改革・規制緩和が、大企業や多国籍企業、マネーゲームに踊る投資家の利害と密接に結び付いたものであり、貧富の格差拡大やテロ攻撃を含む社会的緊張を増大させたという「不都合な真実」だ。

時に凄惨な暴力をも辞さない一連の社会実験の原点は、電気ショックや感覚遮断など過剰な「身体ショック」で人の脳を「白紙状態」に戻す「人体実験」にあるというから、おぞましい。本書の警告は、「巨大地震」、「大津波」、「原発事故」という未曾有のトリプルショックで「白紙状態」を強いられている被災地にとっても、決して例外ではないはずだ。危機の時代を見抜く好著であり、一読を勧めたい。



ムハマド・ユヌス 著  
貧困のない世界を創る  
— ソーシャル・ビジネスと新しい資本主義 —  
熊鷹 弘子 訳、早川書房、2008年

2000年の国連ミレニアム宣言は、15年後に貧困を半減させると宣言した。にも関わらず成果はさほど上がっていない。一日わずか1ドル以下で暮らしている貧しい人々が、世界にはまだ14億人もいる。日本の人口の10倍以上と膨大だ。貧困は弱者

である子ども達を容赦なく襲い、1日3万人、5秒に1人の割合で幼子達の命を奪っている。サハラ以南のアフリカだけではなく。貧国人口の半数近くを占める南アジア地域でも問題は深刻だ。

本書の著者ムハマド・ユヌス氏は、バンクラディッシュでグラミン銀行(村の銀行)を創設し、貧しい女性グループを対象としたマイクロクレジット(無担保少額融資)により貧国の軽減に大きな成果を上げた。同様の取り組みは多くの途上国にも広がり、同氏及び同銀行はその功績により2006年ノーベル平和賞を受賞した。

本書はグラミン銀行だけの紹介本ではない。新たなソーシャル・ビジネスへの挑戦を呼びかけ、貧困の撲滅を世界に訴えている。損失も配当もない、人類の重大な関心事に立ち向かうビジネスへの挑戦だ。強烈な著者の信念と着実な実行力に、共感を覚える読者も多いのではないかと。最近では日本でも、ユニクロとのビジネス提携が話題を呼んだ。



加藤 尚武 著  
新・環境倫理学のすすめ  
丸善ライブラリー373、丸善出版、2005年

人間の行動規範を論じる学問という意味で、環境倫理学も古来からの倫理学の範疇に入る。それが独自の学問領域として広く市民権を得ようになったのは、環境問題が深刻化したからだろう。1972年の「国連人間環境会議」(ストックホルム会議)前後から、

欧米で環境倫理学という言葉が使われるようになった。92年の「環境と開発に関する国連環境会議」(リオ・サミット)以降、環境倫理学は扱う対象や内容を拡大しながら世界に広まった。

いまや「エコしよう」、「エコしている」といった軽いノリで語られるほど、環境倫理学は身近なものとなった。功績の一端を担ったのは、加藤氏が20年前に出版した『環境倫理学のすすめ』だろう。その続編にあたるのが本書だ。

前書は京都議定書のような国際協力体制が生まれることを期待しながら書いたという。今度の本書には、同議定書が誕生と同時に傷だらけになる中、学生諸君のような若い世代への著者の願いや期待が込められている。終章で、「戦争による環境破壊」を警告しているのも、本書ならではだ。

「世界の有限性」、「世代間倫理」、「生物種の生存権」など環境倫理学の三原則は、20年前から少しもぶれていない。

## 学問とは何か？ — 大学は何を目指すべきか —



森田 康夫 MORITA, Yasuo

総長特命教授、東北大学名誉教授(大学院理学研究科)、理学博士  
専門分野: 数学(整数論)、数学教育(少子化が教育に与える影響の研究)、入学試験

基礎ゼミ: 「学校教育の在り方と入学試験の功罪を考える」  
基幹科目: 「科学と情報: 数学と人間 — 数学を俯瞰する」  
総合科目: 「教育と科学技術」

研究室: 国際文化研究科西棟510号室 E-mail: ysmorita@m.tohoku.ac.jp

私は第二次世界大戦が終わった1945年に生まれ、高度成長期の1970年に数学の研究者として出発し、整数論の色々な分野で研究をしてきた。しかし東北大学の教授として入学試験と交通問題を担当することになり、数学教育や入学試験のことも研究するようになった。このため、それまでは新しい数学の定理を探することに私は熱中していたが、現実世界の中で入学試験や教育をどのようにして改善するかを考える様になり、真理を知りたいという「思い」重視から、どの様な結果となったかという「結果」重視に価値観を変えた。

私は教育の任務は若者の能力を開花させ、有能な人材として社会に送り出すことにあると考えている。教育は人材育成を行うサービス産業であり、お客様である生徒や学生の幸せと、社会発展の基盤となる有能な人材を育成するため、できる限りの努力をすべきものと私は考えている。しかし、日本社会では少子化の中で大学の学生定員が増加しており、今まで若者を学習させる主たる動機であった入学試験に受かることが容易になり、誰でもどこかの大学に入学できるという「大学全入」が実現している。そのため、ゆとり教育の影響もあり、今までより少ない知識と能力を持った若者が大学に入学している。私は数学という結果が見やすい教科を担

当していたため、日本がこの様な状態になることを15年余りに気づき、友人達と共に入学試験や数学教育の改善のために努力を続けてきた。

私達や私達の直ぐ下の団塊の世代は戦後の貧しさを憶えており、生きるために必死になり働いてきた。その結果、1980年頃には日本は欧米に追いつき、「Japan as No.1」とまで言われる様になった。しかし日本人は慢心し、バブルを起こし、さらにその処理にも失敗し、現在に至っている。

私は、今日本は分かれ道に面していると思っている。そのため、「日本人はこれからの世界でどのようなことを目指すべきか?」を考えることが必要であるとされており、大学人は、「学問とは何か?」、「日本の大学は何を目指すべきか?」について再考すべきだと思っている。

私は入学試験、数学史、および科学技術をテーマとした授業を行っており、授業を行いながら以上の様なことを考えている。以下でお薦めする本は、この様な視点から選ばれたものである。



■ スティーヴン・オッペンハイマー 著  
**人類の足跡10万年全史**  
仲村 明子 訳、草思社、2007年

人類は約700万年前にアフリカで類人猿から誕生し、その後ユーラシア大陸に広がった。私達ホモ・サピエンスがどのようにして古いタイプの人類(旧人)から進化したかについては、アフリカで進化して全世界に広がったという説と、世界各地で進化し

たという二つの説があり、長年議論になってきた。しかし、最近ミトコンドリアの持つDNAなどを使って過去を解析する方法が発達し、ホモ・サピエンスはアフリカで進化したとの説が有力となっている。

この本では、現代人が持つミトコンドリアやY染色体のDNAに基づき人類史を詳しく分析し、ホモ・サピエンスは旧人から十数万年前にアフリカで進化し、氷河期による海水の低下に助けられ、約10万年前に(スエズ地峡ではなく)紅海の南端からアラビア半島へ渡り、さらに海沿いにアジア大陸に渡り、約8万年位前に東南アジアを介して東アジアとオーストラリアへ、約5万年位前に中東を介してヨーロッパに、さらにベーリング海峡を経て約2万年前にアメリカ大陸に広がったと主張している。

最近の生命科学の発展や人類の起源などに興味を持つ人に勧めたい本である。



■ E・T・ベル著  
**数学をつくった人びと I、II、III**  
田中 勇/銀林 浩 訳、ハヤカワ文庫、2003年

数学は古代文明と共に誕生し、古代ギリシャにおいて数学の学問としての体系ができた。その後、ギリシャの数学はインド・アラビアを介してルネッサンス期のヨーロッパに伝わり、デカルトやニュートンの研究により、「科学を語る言葉」としての数学の地

位が確定した。この本では、このような歴史を数学者の逸話を紹介しながら記述している。

この本は1937年に初版が出た数学史の古典であり、日本語訳は1997年に出版され、2003年に文庫版が出版された。この本が書かれた当時には20世紀の数学の評価が確定していなかったため、20世紀の数学については余り書かれていない。

この本のIでは古代から18世紀までの数学を紹介し、IIでは19世紀前半の数学を紹介し、IIIでは19世紀前半から20世紀初めまでの数学を紹介している。

この本について、森毅氏は「微分積分学が何をしたくて考え出されたかわかったら、微積分発明の裏にニュートンとライプニッツのどろどろした先取権争いがあったと言ったら、俄然興味がわいてきませんか?」と言っている。

科学や伝記に興味を持つ人に勧めたい本である。



■ マーカス・デュ・ソートイ 著  
素数の音楽

富永 星 訳、新潮 Crest・ブックス、2005年

オイラー(1707年-1783年) は  
 $\zeta(s) = 1 + 2^{-s} + 3^{-s} + 4^{-s} + 5^{-s} + \dots + n^{-s} + \dots$   
 で定義される関数(ζ関数と呼ぶ)を考え、「自然数は素数の積として表せる」という定理が、  
 $\zeta(s) = \prod p (1-p^{-s})^{-1}$  (pは素数全体を動く)

という等式で表現できることを発見した。その約1世紀後にリーマンはζ(s)を複素変数の関数として研究したが、その時発見された「ζ(s)=0となる複素数sは、負の整数でなければ、実部が1/2である」というリーマンの予想が本書のテーマである。

この本は、オックスフォード大学の数学の教授で、科学関係の記事を多数書いているソートイ氏が、リーマン予想を中心とする素数研究の現状について書いたものである。数式をほとんど使わないで書きながら、整数論が専門の私の目から見ても、非常に正確に数学的内容を伝えている。

この本は、オイラー、リーマン、ゲーデルなどの数学者の人間的魅力を、素数というテーマに沿いながら紹介している。これから数学を専門として学習しようとする人、趣味として数学に興味を持っている人、数学とはどのような学問であるかを知りたい人などにお勧めしたい本である。



■ 柳田 邦男 著  
ガン回廊の朝 (あした) (上・下)

講談社文庫、1981年

柳田邦男氏はノン・フィクション作家であり、医療や航空などを専門分野としている。本書は、昭和37年に設置された国立がんセンターの開設当初のガン克服を目指した戦いを描いた名著である。

ガン医療は急速に進展しており、最近では完治する

人が増えている。しかし、当時は5年生存率も低く、初代のがんセンター総長がガンにかかったときには、本人にガンであることを告知しなかった。このように、この本で書かれていることと現在のガン治療とはかなり異なっている。しかし新しい知見を得て科学を進歩させる努力はいつの時代でも同じであり、この本には高度成長期に日本人がガン撲滅という夢に向かって戦いを始めた時代の熱気が描かれている。

この本は読み物としても面白いが、柳田氏は徹底した取材に基づき客観的に書いており、この本を読むことにより、研究成果を出すとはどういうことか、現実を改善するとはどういうことかを知ることができる。私達が「少子高齢化と財政危機に直面した日本を、これからどう立て直して行くか」を考える際の参考としても、この本は役立つものと思われる。



■ 石巻赤十字病院 著、由井 りょう子 文  
石巻赤十字病院の100日間  
—東日本大震災 医師・看護師・病院職員たちの苦闘の記録—  
小学館、2011年

石巻市では東北地方太平洋沖地震による大津波により約4000人が命を落とし、多くの人が家屋をなくした。石巻赤十字病院は、石巻の病院のなかで唯一津波の被害を逃れ、震災直後の医療の中心となった。この本はそのときの同病院の活動を記録

したものである。

石巻赤十字病院では被災者の医療の必要性を定めるトリアージを行い、限られた医療資源を効率的に配分し、地域内のすべての避難所の状況を巡回調査し衛生環境の確保につとめ、外部の機関と連携することにより必要な物資を確保し、多くの被災者の命を救った。

本書を読むことにより、災害医療とは何かを知ることができる。また、本書は単なる読み物としても面白く、付属の看護専門学校が津波に襲われ、避難した学生が被災者の医療につくす様子や、逃げ遅れて津波に流された人が病院に運ばれ低体温症や肺炎の治療を受ける様子などが、緊迫感を持って伝わってくる。

日本人は東日本大震災に際し冷静さを失わず、協力して犠牲者の数を抑え世界の賞賛を受けたが、本書によりそのことが確認できる。



■ 佐野 眞一 著  
津波と原発  
講談社、2011年

佐野眞一氏はノンフィクション作家として定評のある人だが、東日本大震災直後の3月18日から津波で被災した地域の取材を始めた。

佐野氏が訪れた宮城県南三陸町では、志津川病院の建物の4階部分までが津波に襲われ、屋上まで

逃げられなかった患者は津波にのみ込まれた。陸前高田市では3000戸以上が全壊し、2000人近くが死亡または行方不明となった。宮古市田老町では、高さ10メートルの防潮堤を作って津波に備えていたが、津波は防潮堤を乗り越え住民を襲った。佐野氏はこれらの町の被災状況を生々しく描写している。

また、佐野氏は4月後半に原発事故で立ち入り禁止となっている楢葉町、富岡町、浪江町などを訪れ、死の町となった現地の状態を描写し、なぜ東北電力の事業範囲である福島県双葉郡に東京電力福島第一原子力発電所が作られたのかを説明している。本書を読むことにより、福島第一原発が作られ深刻な事故を引き起こした社会的背景を知ることができる。

本書は、「津波と原発」について非常に良く書かれた本である。

## 本との出会い — 今、君たちだったら —



海老澤 丕道 EBISAWA, Hiromichi

総長特命教授、東北大学名誉教授(大学院情報科学研究科)、理学博士  
 専門分野:理論物理学(超伝導/超流動、ナノ物理学)、ゆらぎ科学  
 基礎ゼミ:「創造的な研究とは—ノーベル物理学賞に学ぶ」  
 展開ゼミ:「創造的な科学研究と人間社会」  
 基幹科目:「自然界の構造:おはなし物理学」  
 総合科目:「科学と人間」

研究室:国際文化研究科西棟411号室 Email: ebi@m.tohoku.ac.jp

高校生時代までに学校で得る知識はたいがい、皆一緒に同じことを同じところまで教わって得るものだ。入学試験問題をなるべく正しく解くために役立つ学力が身につくであろうが、それは結果を教わることが主であり、学問とは言えない。皆が同じことを教わるからではなく、結果を教わるからだ。大学での学びは記憶に取り込んだ広い知識ばかりではなく、身についた力が目標でなくてはならない。それも、既存の問題が解ける力ではない。私はそんなことを考えて、担当する授業科目の内容をより良くする努力を続けてきた。

およそ半世紀前、諸君と同じように大学生としての一步を踏み出した。1年半ほど考えた末、私は物理学者になる道をたどり始めた。その頃は物理学科自体が小さな学科で家族的であり、好きな分野と限らずに皆で専門書を一緒に勉強し、専門外の本を輪読する学部学生生活だった。その時代、つまり進路を決めるまでと研究生生活が本格化するまでの過程で、それまで子供時代から読んできた本とは別の種類の本に知識を求めた。高校生時代までは文学書が主だったし、子供の時は子供向けの科学書も多く読んでいたのだった。

私の「読書の年輪」はその学生時代のところの刻みが厚い。論文を読むことに追われる前のことで

ある。読んだ本はその後の研究に役立ったというよりも研究をする私の心を作った本といえる。そう長い時間を読書に使う余裕もなかったので、多くは新書や文庫本であった。分厚いような本は題目に惹かれて買っても読み通せなかったように思う。

教養教育院に所属して教養教育科目を担当することになって新たに授業内容を創ることになり、あの頃に読んだ本が半世紀の時空を超えて頭の中によみがえってきた。それらの本に気持ちを高められて、研究がどんな意味を持つかを課題にした「科学と人間」の授業の企画ができた。小学生から中学生の頃に愛読した一冊の科学啓蒙書に影響されて、数式になるべく頼らないで物理学を知り、身近な現象について考える力を養おうとする「自然界の構造:おはなし物理学」の授業内容が構想できた。

それらの科目の詳しい説明はさておき、それらを企画・構想する基となった本を紹介しよう。私が出会った本の一部である。物理学に偏っているが、物理学が学問の樹における幹の位置にあるのだから、として許していただきたい。手にとって読んでもらうと良いが、少なくとも参考になることをのぞんでいる。君たちがそれぞれ読みたい本、君たちを育ててくれる本と出会うことが願いである。



■ アインシュタイン/インフェルト 著  
**物理学はいかに創られたか (上・下)**  
 石原 純 訳、岩波新書、上1939年、下1940年

二十世紀に活躍した世界最有名人で相対性理論を打ち立てた人として知られるアインシュタインは理論物理学者の中でも代表的な存在だ。自然現象を相手に人間の心が物理学という「物語」をどのようにつくり上げようとしてきたか、evolution (発展、



■ ポアンカレ 著  
**科学と仮説**  
 河野 伊三郎 訳、岩波文庫、和訳初版1938年(原書1902年)

クラスメート達のおかげでこの本に出会った。量子論・電磁気学など専門基礎科目を学ぶのに忙しかった頃、泊まりがけの読書会の提案があり、かなりの人が参加した。伊豆にあった大学の施設だったが、楽しい集まりだった。読んだ本がこれである。

進化)として語っている。数式を使わないで「たとえ」で説明し、要所に図・写真を使った丁寧かつ明快な記述である。

まず、ニュートンの力学とファラデーとマックスウェルによる電磁気学の歴史を「力学的世界観の『勃興』と『凋落』」として語り、物理学としての内容を説明し、自然科学とは人間のいかなる活動であるかを教えてくれている。次いで相対性理論・量子論を詳しく説いている。アインシュタインはボーアらの波動関数の「確率解釈」を認めなかった人だが、そこはインフェルトがしっかり書いてくれた。

訳者の石原純(元東北大学教授)はアララギ派歌人でもありきれいな日本語で書かれているが、初版以来70年そのまま発行され続けた文面はいくらか古めかしいし、視覚的にはほとんど文字ばかりではある。それだけに、内容がぎざり詰まっている。文系系系を問わずに思考力と知的好奇心を備えた学生なら読み進められる名著である。

ポアンカレは数学者だが理論物理学者・天文学者としても功績を残している。論文だけでなく著書の数も膨大である。科学思想については、この本が彼が書いた最初のものであり、最も有名である。

私達が直接に興味を持ったのは第九章「物理学における仮説」であったのだと思う。物理学は実験によって真実を知る学問である。だが、それなら数理物理学の役割は何なのか。ここで、事実の集積が科学ではない、それは石を積み上げて家にはならないと同じだ、という。良い実験は一般化を許す、これにより充実してゆく科学を蔵書が絶えず増大する図書館にたとえると目録を調整する役割を果たすのが数理物理学だ、という。一般化はそれぞれが仮説であり、物理学ではそれは多く数学的形式をとる。こう始めて、科学がどう発展してきたか、どうあるべきかを豊富な例をあげて教えてくれる。科学を学ぶ人にも哲学を学ぶ人にも優れた古典である。



寺田寅彦 著 / 小宮豊隆 編  
寺田寅彦随筆集第二巻 [全5冊]  
岩波文庫、1993年

寺田寅彦という物理学者は夏目漱石の『三四郎』に登場する野々宮さんのモデルとして、また「天災は忘れた頃に来る」という防災の警句で知られ、随筆家で俳人でもある。

寺田の研究には、まだX線が粒子線か電磁波か

が不明だったとき、鉱石の結晶による波としての回折の実験を行ったものがある。実験を成功させ Nature 誌に発表した。しかし、ブラッグ父子がほんの少し先んじて研究していたことを知って寺田はこの研究を止め、全く別の方向に研究を変えた。「人まね嫌い」だったそうである。ブラッグ父子はノーベル賞を受賞し、寺田は学士院恩賜賞を受けた。

随筆集『備忘録』中の「線香花火」には花火の説明に加えて、日本固有の線香花火が次々に枝分かれする現象を日本人の手で解明したい、西洋の学者の掘り散らかした後へ鉱石のかけらを探しに行くもよいが足下に埋もれている宝をも忘れてはならない、と書いている。この『備忘録』は第2巻に収録されているが、文庫には第1巻から第5巻まであり、科学を対象にしたものに限らず文学味豊かな多くの随筆が集められている。すべての分野の学生諸君に勧めたい。身近なことを観察しながら本質を洞察する寺田寅彦の精神を学び、楽しんでほしい。



湯川秀樹 著  
目に見えないもの  
講談社学術文庫、1976年

日本人の心が敗戦直後沈んでいた時代に、湯川秀樹が日本人として初のノーベル賞を受賞するニュースは人々に元気を与えた。多くの若者が物理学の研究を目指すことになった。私もその一人である。しかし、湯川が多くの本を読んでいる教養人であり、格調高

く深い内容をもつ学問論や現代の物理学の解説を多く書いていることには気づいていなかった。最近改めてこの古くてなお新しい本を読んでみた。

湯川の研究は理論物理学である。現代の理論物理学が何を研究何をめざすのか、当時（1940年代まで）の状況を踏まえて述べたのが前半である。後半には自らの生い立ちや折々感じたことを振り返り、自然観、研究観、科学論等々を述べた文章が集められている。私にとって印象深い箇所の一つは「科学と教養」の中で、ある自然科学書が単なる知識としてではなく真に一般人の教養に役立つか否かは、主として著者の心構えとか気魄とかがその内容を通じて感得せられるか否かだと書いているところである。もう一つは「目に見えないもの」の中で、黴菌の研究と医学をたとえにして、人々に原子や電子の研究に親しみをもつよう仕向ける必要を示唆しているところである。今日の、人間生活と先端科学の精神的な乖離を予想していたかのようなのである。



ジェームズ・D・ワトソン 著  
二重らせん  
—DNAの構造を発見した科学者の記録—  
江上不二夫 / 中村 桂子 訳、ブルーバックスB-1792、講談社、2012年

科学研究の現場の話は一般の人たちには小難しくなってしまう、面白くもないだろう。これは私が研究を始めた頃に抱いていたイメージであった。ところが、この本を読むと、研究がどんなに人間的であり、社会的であり、すごいドラマの展開であるか

を如実に感じることができる。

遺伝子の所在は細胞の核にある核酸、DNAの上であろうと分かり始めた時代に、DNAの物理的な構造模型を提唱したのが著者ワトソンとその共同研究者フランシス・クリックであった。その基となったX線回折の研究を行ったモーリス・ウィルキンスとともに1962年のノーベル生理学・医学賞を受けている。研究は1951年から1953年にかけて展開されたが、その経過の実に人間臭い記録が本書である。

私は博士課程の学生だった時に、原著が書かれた（1968年）同年にタイムライフインターナショナル社から出版された同じ翻訳者達による「DNAの構造を発見した科学者の記録」と副題がついたものを読んだ。感動したと言うより、人間がすることの意味を妙に納得してしまったように思う。一方で、ワトソンの強烈な個性に対して違和感を覚えた気もする。



佐野昌一 著  
おはなし電気學  
科学知識普及會（明治書院発売）、1939年（絶版）

こんな感じの本を今、知識欲盛んな子供達が食い入るように読み進むところを想像してみると本当に楽しい。電子の話から始めてざっと挙げると、静電気、電流、電磁気の話、発電の話、家庭内の電気の話、電車の話、電気機関車の話、電話の話、電

話交換機の話、放送の話、真空管の話、電波の話、落雷の話、映画の話、テレビジョンの話まで47話の構成である。もちろん縦書き、右めくりの、小説スタイルである。それもそのはず、著者は海野十三（じゅうざ）のペンネームでSF小説や探偵小説を書く通信省電気試験所研究員の技術者・作家である。著者自身手書きの挿絵も豊富であり、楽しめる。

序文にテレビジョン開発で知られる川原田政太郎元早大教授が、「快著」としてその平易さ、面白さ、かゆいところに手が届く様を賞賛している。アマチュアファンのみならず、学生、専門家もこれによって真の意味を初めて掴み得るところ多々ある。私は父の書架で見つけ、出版後10数年を経たこの本の虜になってしまい、小学生時代から電気が好きになった。今は内容的には古い部分がほとんどだが、この本を読み返すと科学技術の知識とはかくあるべきだということがよく分かる名著である。附属図書館に収蔵されている。

# 「大学時代でなくても、 できること」ではなく



柳父 圀近 YAGYU, Kunichika

総長特命教授(2009年度~2010年度、2011年3月末退職)、東北大学名誉教授(大学院法学研究科)、博士(法学)  
専門分野:西洋政治思想史、マックス・ウェーバー研究

※2010年度

基礎ゼミ:「文明論の概略を読む」/「福沢、岡倉、内村—西洋化と知識人」

基幹科目:「法・政治と社会:政治学入門」/「歴史と人間社会:職業観念から見る社会史」

総合科目:「西洋史と政治思想」

私は長らく西洋政治思想史を担当してきました。とくに近代西欧に生じた市民社会の特質と近代国家の関係を、またマックス・ウェーバーの学問と思想を研究テーマとしてきました。

川北でもその関連のテーマで授業をします。

それはそうと、皆さんはこれからの大学時代をどのように使おうと思っていますか?

大学で勉強するということは、「世界の多面性」を知り始めることではないかと私は思っています。皆さんも、世の中にはいろいろな考え方があって、いろいろな価値観を持った人たちがいるのだということに次第に目覚めるのではないかと考えています。大学で、異なる価値観からは、世界のあり方が、自分の見方とは違って見えて来るのに気がつくことは大切です。(世の中の多様な考え方に接するのは、社会人になってからではないか、と思うかもしれませんが、しかし社会人になると、案外その組織や業界の一つの考え方とか時代の空気などに染まってしまうものです。)

大学では、授業を通じて、それまでの自分の頭とは違った考え方や、物事の捉え方に出会うでしょう。いろいろな学説や本に出会います。また、自身のいろいろな先生たち、友人たちとディスカッション

ンして、くり返し、「世界の見え方」の多面性に目覚めて行くことになるでしょう。しかも「いろいろな見方」を、「私利私欲」を離れて検討し、理性的・批判的に深く考察する訓練を体験するはずです。そしてそれこそは、大学生活ならでは、一種の「純粹経験」ではないかと私は思っています。そしてその中で先生や友人たちとの交流を深めてゆくことができれば、それも生涯の「財産」になるだろうと思います。

4年間はアツという間です。しかし上手に使えば実りの多い時間です。ですから何であれ、「大学でなくても」できることや、「大学を出てからこそ」できることに、学生時代を使うのは賢明ではないと思います。「大学でなければ」できないのは、たぶんこの知性の「純粹経験」でしょう。

大学には、さまざまな立場の研究者がいることが必要であり、学生は、多様な立場の学問に接し得る必要があるということです。また是非いろいろな本や文献に接してほしいと思います。この後すこし本を紹介しておきますが、それはあくまで私の講義との関係で参考になるものを紹介するという限りのものです。

(2010年2月)



■ マックス・ウェーバー 著

## 職業としての政治

脇 圭平 訳、岩波文庫、1980年、原書1919年

古今の「政治の世界」に通じた著者の知識が惜しげもなく使われ、また「政治と人間」についての深い思索が語られている、まずは類例のない講演です。

もちろん時代の制約を受けています。しかしぜひ



■ 大塚 久雄 著

## 社会科学における人間

岩波新書、1977年

この本はNHK 大学講座の講義をもとに書かれています。学生時代に読んでから今日まで多くの示唆を与えられて来ました。

社会科学はまず近代の西洋で、近代西洋人とその社会を自明の前提として形成されました。しかし

読んで、いろいろ考えてみてください。

第一次大戦直後の混乱したミュンヘンで学生団体の求めに応じた講演ですが、今日でも大きな影響を、政治に関心のある人々(政治家だけではなく)に及ぼし続けています。

ひとつの行為がもたらし得る「意図せざる結果」をも、できるだけ予測して(その予測のためにこそ、社会科学は存在する)、そうした「意図せざる結果への責任」をも引き受けるのが、政治における倫理的態度(=「責任倫理」)だ。それは「動機の純粹性」に生きる「心情倫理」(信念倫理)の態度とは違って来る、という議論を——他にもいろいろ「政治の世界」の特質を論じていますが——とくにじっくり読んでみてください。

変則的なアドヴァイスですが、この本に限っては、最後から読み始めて、前へ前へとさかのぼり、もう一度頭から読むのがよいかも知れません。

そのままでは近代西洋以外の時代や文化圏の諸社会について学問的に分析するには無理が生じます。例えば近代日本の人間と社会には、近代西洋の場合と重なる面もありますが、大きな違いもあります。西洋の場合と学問的に比較するにはどうすればよいでしょうか。もちろん共通する要素の分析は重要です。しかし、それぞれの社会の人々の社会的行為の「主観的動機の意味」をよく理解し、社会現象を、その動機を「原因」として生じるものとしても因果関係的に十分説明する必要があります。この場合、それぞれの社会の文化、特に宗教意識の影響は大きな意味を持ちえます。そうした宗教文化との関係で生じる「人間類型」ないし「エートス」に注目して社会科学の新たな方法を形成したのがマックス・ウェーバーでした。

大塚さんはウェーバーのこうした方法をマルクスの歴史理論との関係で考察しながら、独自の方法へと展開しています。



■ マックス・ウェーバー 著  
**プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神**

大塚 久雄 訳、岩波文庫、1989年、原書1920年

現代社会科学の古典のひとつ。単なる「営利欲」や「投機」、また政治的特権に「寄生」する営業ではなく、ひたすら「合理的な隣人愛」実践としての職業活動にいそむことへと、当時の人々を強く動機づけたのが、プロテスタンティズムの職業観念

だったと分析しています。「社会」とはある意味では「職業」のネットワークです。プロテスタンティズムの「職業観念」は、封建時代の職分のネットワークたる「身分制社会」を一変させ、「市場」に媒介された「市民社会」を形成する社会の動きを加速させた。こういう分析です。

しかし歴史はここにとどまらず、同じプロテスタンティズムの「職業観念」は、意図せざる結果として、とどまることを知らない近代資本主義の進展にスイッチを入れました。その進展の先に生じる「人間疎外」の問題も、本書は鋭く論じており、現代の社会科学に大きな影響を与えています。

ところで、西欧とは違う文化伝統のもとにあった日本や東アジアの「近代化」の場合、こうした問題にあたるものは一体どうなっていたのでしょうか？

こうした問題関心にもいざなう本です。



■ 福田 歓一 著  
**近代の政治思想**  
 —その現実的・理論的諸前提—

岩波新書、1970年

「デモクラシー」とか「国民国家」と云った政治制度や政治理論の多くのものは、ヨーロッパの歴史の中で形成されて来たものです。

もちろん、現代の世界では、ヨーロッパ文化圏の重みは相対化されていますし、また時代的にも

「近代」と「現代」では大きな変化が生じています。しかしそれだからと云って、政治について考えてみようという場合は、また積極的に政治学を学びたいという人は、西洋近代の政治学、政治思想の歴史を学ばないですますわけにはゆきません。中世や古代のヨーロッパ政治思想についても学んでおく必要があります。デモクラシーと云う言葉が、古代ギリシャに由来することは知っているのではないのでしょうか。

この本は、戦後の政治学と西洋政治思想史研究の発展に大きな役割を果たし、07年に亡くなった著者の、岩波市民講座の講演がもとになっています。学生時代に読んで政治思想史の扉が開かれた感のあった本の一つです。

なお、少し難しいかもしれませんが、同じ著者の、2009年刊行された論文集『デモクラシーと国民国家』(岩波現代文庫) も読んでみるとよいでしょう。



■ 丸山 眞男 著  
**忠誠と反逆**  
 —転形期日本の精神史的位相—

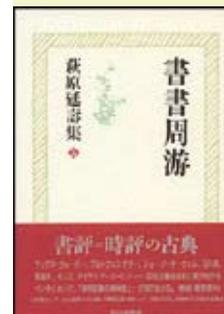
ちくま学芸文庫、1998年

著者は日本政治思想史の専門家です。戦国武士の心には「天道」への忠誠心と、「主君」への忠誠心との矛盾が宿っていたと分析しています。その矛盾の間に生きていたゆえに、武士は時には天道に反する主君をいさめ、その方法として「腹を切る」場

合もあったと言います。

今日でも、ひとは「普遍的な原理(道理)」と、「組織」の「特殊利害」との緊張関係の間に立たされることがあります。そのとき人は「自分はどうする?」という問いに目覚めます。その自問によって初めて、ひとは「個人」としての自分に目覚めるのです。ところが日本では明治後半以後の「発展」とともに、上述の意味での「個」の意識がむしろ失われてゆく傾向が見られると、著者は資料によって分析しています。

この傾向にそれぞれの思想で抵抗した人びとを論じた論文「福沢・岡倉・内村; 西欧化と知識人」の鮮明な印象は忘れられません。また幕末と明治初期にはあったいろいろな政治的、思想的可能性を論じた論文「開国」も示唆に富みます。



■ 萩原 延壽 著  
**書書周游**

萩原 延壽集5、朝日新聞出版、2008年

萩原さんは本来歴史家ですが、政治、芸術、思想などさまざまな分野の本の書評を集めたものです。最初は、1972年に文芸春秋社から出た名著です。

ひとくちに「書評」と云いますが、他人の書いた

本を公平に、また深く理解して紹介し、そのうえで、しっかりした批評を書くのはなかなか難しいものです。今日でも世間には「その本がちっとも読めていない書評」や、「内輪ほめ」の類が少なくありません。しかしこの本は、しなやかな自己意識と、「他者のものの見方」を積極的に理解しようとする精神による、本当の「対話」が伝わって来ます。これを読んで著者のその精神に「感染」することを薦めます。

この本で取り上げられているのは、20世紀の哲学者バーリンの名著『自由論』から、ナチズムとの困難な闘争を闘った名指揮者フルトヴェングラーの『書簡集』に至るまで、多岐にわたっています。ですからこの本は、社会と文化と歴史についてのすぐれた入門書でもあります。続編と云うべき『自由の精神』の巻も是非読むことを薦めておきます。

## 学ぶ本・議論する本・楽しむ本・鼻歌まじりの本… 出会った本



秋葉 征夫 AKIBA, Yukio

総長特命教授(2008年度～2010年度。2011年3月末退職)、東北大学名誉教授(大学院農学研究所)、農学博士  
専門分野:動物栄養生化学、家禽学

※2010年度

基礎ゼミ:「食の比較生化学 -ヒトと動物-」/「ペット栄養から観るヒトの食と栄養代謝」

基幹科目:「生命と自然:鳥とニワトリの生物科学」

総合科目:「食から探る生物・生命・暮らしの科学」

私が本を読み始めたと言える(意識している)のは高校時代だと思う。それは他の人たちに比べて断然遅く、自慢にはならない。高校時代は歴史小説を若干読んだ。吉川英治の文芸書『私本太平記』だったと思う。足利尊氏の波乱に満ちた生涯を活写したもので、この本を手にして以来、本を読むことの抵抗感が薄れたように記憶している。その後、東北大学に入り、クラブ(軟式テニス同好会)に入って、先輩からいろいろの書物を紹介され、そしてそれらの本の感想についての議論や好きな作品の文章の書き写しなどを経験し、やっと半人前の「本読む学生」になったと思っている。学生時代は背伸びしながらも、詩集や哲学系の本にも手を伸ばし、結果的に人文系の知識も少しは得ることができた。

研究生生活(本学農学部)に入ってから、農学や栄養学の専門書や専門関連の書籍を読むことで手一杯になってしまった時期が多い。さらに昨今は、時折に読む一般書は心休まる小説や随筆が多くなってしまった。そんなわけで、大学の教師としての読書量はきわめて少ないものと自覚(反省)せざるを得ない。それでも、好きな本や、勉強させられた本、印象深かった本は頭に浮かぶ。

教養教育院の教員として全学教育の一部を担当

してから2年が経過する。担当講義は、私自身の40年間の研究領域であった食・栄養・生化学・動物・ニワトリを中心に組み立てた。講義の狙いは、私たちにとって身近でしかも大切な「食と栄養」そして「鳥類やペットなどの身の回りにいる動物」をよく観察し、ヒトと生物たちの「生命の営みとその不思議さ」を考えることを通して、身近な事象と視点から「科学する」することの楽しさを身に付けてもらうこと、と私は考えている。

ここに紹介する書籍は、私が読んで自身の生活に役立つ本、楽しかった(良かったと感じた)本である。いくつかは私の専門分野と講義内容に少し関連し、いくつかは関係なく感銘した本、そして気持ちが落ち着く本、楽しかった本、である。

何と云っても、本を好きになること、そのために好きな本を見つけること、好きな本に出会うための少しの努力をすること、が大事のように思う。学生時代は、ジャンルにこだわらず何でも読める、何でもチャレンジできる、しかし過剰に気負うことなしに過ごせる、長くはない貴重な期間と捉えたい。(2010年2月)



木下 是雄 著  
理科系の作文技術  
中公新書、1981年

小中学校時代に課せられた「作文」そして「読書感想文」がきらいだった。人を感動させるような「感想」はとても書けなかった。このように「作文」「文章づくり」「レポートづくり」は苦手のままに過ごしてきたが、大学院学生時代に私の恩師である松

本達郎教授にこの本を紹介され、そして読破してからは、文章に対する苦手意識がほぼなくなった。そしていろいろな報告の文章や本でも、この「理科系の作文技術」を頭に思い出しながら味わうことができるようになった。

レポートなどを書くためには、主題を決定してその材料を集め、パラグラフを構成して文を組み立てる。その中で、事実と意見を明確に区別する、読む対象者を意識して結論を早めに提示する、わかりやすく短い文章にする、漢字を使わずに(文を黒くしすぎない)、同じ語尾の繰り返しは使わない、など、多くの注意点が示され、今でも私の中に生きている。小学校・中学校教育の中では「主観的記述」を植えつけられてきた面が強いが、大学および社会では調査報告、出張報告、技術報告、開発計画の申請書など「客観的記述」を求められる場面が多いのではない。

私自身、これまで大変参考になった「指南書」である。



本川 達雄 著  
ゾウの時間 ネズミの時間  
—サイズの生物学—  
中公新書、1992年

私は40年以上にわたって「動物栄養生化学」を勉強し、研究し、それらを学生たちに指導してきた。栄養学、栄養生化学は動物の体と生命の科学であり、その形態と機能に密接に関連するものである。私の恩師の一人である堀口雅昭教授からは動物栄養学

を全動物の体のサイズから認識することの大事さを指導していただき、エネルギーの流れやエントロピーの教えもいただいた。本書は、動物のサイズから動物の行動、動物のデザイン、動物の機能を解釈しようとしたものであり、ネズミからゾウにいたるまで全動物に通じる理論を導き出そうとする書である。

動物のサイズによってその動物が感じる時間が異なること、動物の行動圏と食事量、動物の運搬コスト、動物サイズと呼吸数や心拍数の関係などが論理的に展開されている。また一生の間の心拍数や呼吸数は動物のサイズに関係なくほぼ同じであり、動物のエネルギー消費量は体重の3/4乗に比例することなど、生物と生命を理解する意味で心に残りやすい記述が多い。

本書全体がわかりやすい文章で構成されており、生物学を学んでこなかった学生にも手に取りやすい新書(230頁)であり、動物世界を理解し、生命を思い、そして私たち自身を考える観点を提供してくれる本の一つといえる。



■ 安田 喜憲 著  
**森と文明の物語 —環境考古学は語る**  
 ちくま新書、1995年

私の専門は農学であり、「農」は人類が長年にわたって築き上げてきた壮大な知恵であり、文化を作り出す源である、と学生に教えてきた。5000年前に誕生した都市文明はいまや地球環境を破壊しかねない文化へと展開してしまったのを、私たちは目

にしている。

本書（著者は東北大学の卒業生）では、文明の発祥の地であるメソポタミアやその周辺領域では豊かな森が存在したが、その名残りは地中海沿岸に少しだけ残っている巨大なレバノン杉に見られるのみで、現在ではこの地域にいわゆる森は無い、と述べられている。もともと文明と森は共存していたのだが、文明の深化とともに破壊された森林、森林争奪戦争だったというトロイ戦争、地中海沿岸での森林伐採後の代替として植栽されたオリーブの木、消えたモアイの森の話など、化石や花粉の分析と放射性炭素などの技術を用いた環境考古学を駆使しての森林の盛衰を語る本書は、「文明・環境・農」を考える意味でも多くの視点を与えてくれる。そして、私たちの身近にある里山の森の歴史と機能から、「共生の森」の保存を論じていることに心を傾けたい。

関連する書籍として、『森林の思考・砂漠の思考』、鈴木秀夫著、NHK ブックス（1994年）も面白い。



■ ピーター・メンツェル/フェイス・ダルージオ 著  
**地球の食卓**  
**—世界24か国の家族のごはん—**  
 みつじ まちこ 訳、TOTO出版、2006年

食べ物の写真を見るのはとても楽しい。どんな人たちがどんな食事をしているのかを知るのも楽しい。食は等しく人間の生活の基本であり、外国に旅行した時、私はいつも食の市場を訪れる。市場の多様な食材、そしてその国特有の食品を見ると、その国と

住む人々の大半を理解できたような気分になる。

本書は、世界のいろいろな人種の家族と1週間分の食品のポートレート、食事風景を中心としたルポルタージュであり、それぞれの家族の1週間分の食品、各家庭のご自慢のレシピ、食の問題を提起する6つのエッセイを収録した写真集である。豊かな環境で豊富な食材を使い、幸せそうに写る家族、そして片方では、厳しい環境で数少ない食料・食品を囲む固い顔の家族の写真もある。本来楽しかるべき食卓・食品の前での写真も、場所によっては苦しい悲しい絵に思える。心に重く響く写真集でもある。世界人口68億人のうち、約十数億人は飢餓に近い状況にあること、そして一方では有り余る食料の中で肥満に苦しむ十数億の人たちがいることを思い起こさせる。

しかし、家族がいる食事風景はやはり人の心を安んじさせることは間違いない。食について考え、学ぶ学生に限らず、本書を見てみる価値はありそうだ。



■ 千葉 成夫 著  
**奇蹟の器 —デルフトのフェルメール—**  
 五柳叢書、1994年

いつから絵好きになったのか、好きといっても油絵を描くわけではなく、見るのが少し好きだけだ。オランダ、デルフトの画家フェルメールの作品を初めて観たのは国立西洋美術館の特別展での「手紙を書く女」である。静謐で時が止まり、手紙を書く女

性の遠くを想う心がじみ出ている画面に惹かれた。

本書はフェルメールの作品から著者が独断で選んだ数点の作品（私の好きな数点でもある）について、フェルメール自身がどんな想いで何を描こうとしたのか、観る人が作品から何を感じるのか、などを述べたものであり、奇蹟の器であるフェルメールの絵を心底から愛する著者の姿勢が浮かびあがる。

一般美術書にあるように作者と作品の歴史を紹介してはいるが、それよりも、フェルメールの絵に対する著者（東北大学の卒業生）の深い思い入れに基づいた文学作品的な印象を私は受けており、美術書としては少し変わっているのかもしれない。フェルメールの美術書を何冊か読んだが、フェルメールの作品の紹介などは『謎解き フェルメール』小林頼子・朽木ゆり子（共著）（新潮社、2003年）がお勧めだろう。

絵は本を読むよりも、直接観て、感じることにあたる。フェルメールの30数点の作品のうち、これまで約半分は観ることができた。



■ 東北大学農学部「農学ビジョン懇談会」（編）  
**人間と環境のコミュニケーション農学**  
**—杜の都からの発信—**  
 農林統計協会、1997年

これは手前味噌の本の紹介になる。この手の話を嫌う人は多いと思うが、その人たちには下記の拙文はスキップしていただかざるを得ない。

これまで（特に1990年代まで）農学は少し分かりにくい、農学の方向性が紹介されていない、農学

が過小評価されているなど、農と農学に関する多くの意見・懸念が出されてきた。本書は食料問題、環境問題、資源問題などの深刻化が予測される21世紀に向けて、農学の果たすべき役割とその将来ビジョンを発信したものである。私を含めた農学部の5人の若手教授（1995年当時）が3年余りの議論を経て、農の歴史を踏まえて今世紀における農学の役割を「コミュニケーション」というキーワードから展望したものである。本書の中にあるように、私たちの生活そして科学の中で「生命の神秘」「生命のゆらぎ」「生命生理の多様性と可塑性」をコンセプトにする「農学的思考」を身につけることは、多様な視点形成が重要視され、環境の時代ともいわれる今世紀の私たちに、なお一層望まれているように感じられる。

長大な農の歴史に思いを馳せるとともに、農が20世紀までに造り上げてきた功罪を見据えながら、農と農学と人間の行きかたに触れてみるのも楽しいのではないかと。

# 教育・研究の舞台裏

— 私を支え・慰め・励ましてくれた本 —



海野 道郎 UMINO, Michio

総長特命教授(2008年度～2010年度。2011年3月末退職)、東北大学名誉教授(大学院文学研究科)、工学修士  
専門分野:数理計量社会学、環境社会学

※2010年度

基礎ゼミ:「人と社会—未知の世界を拓く—」/「事実を探る—情報と現実の間—」

基幹科目:「社会の構造:社会の成り立ち—ミクロレベル—」/「社会の構造:社会の成り立ち—マクロレベル—」

総合科目:「社会的シナリオ:環境問題の基本メカニズム」/「社会的決定を報道に見る」

「チリリンチリリンじてんしゃが、おやまのみちをと おって」と始まる本があった。ロクちゃんという子供が、いろいろな動物たちに巡り合う。白い髭を生 やしたヤギのおじさんに出会ったロクちゃんが問い かけ、おじさんが答える、「おじさん、おひげはな ぜしろい。／ちいさいときにしろいこめ、たくさん たべたでしろいのだ。／ロクちゃんこっくりうなずい た」。——「白い米」が憧れの時代だったのだ。この、 小さい頃に読み聞かせられた絵本が、私の記憶に 残っている最初の本だ。

少年時代に出会った本の中でも、湯川秀樹監修 『理科図鑑』は忘れがたい。湯川秀樹のノーベル 物理学賞受賞(1949年)が契機となったと思われる この本を、私は頁がばらばらになるまで読み込んだ。『理科教室:ケンちゃんの不思議』(著者失念) は、科学する心を育ててくれた。オパーリン『生命 の起源』は、生物から化学に私の関心をシフトさせ た。こうした読書経験は、小学校以来の小動物飼 育や中学・高校時代の化学実験の経験と相まって、 大学受験に際して迷うことなく理科系を選ばせた。

しかし、私は今、文学研究科出身の総長特命教 授として、君に語りかけている。その間の事情を 記す余裕はないが(とりあえずは、中村捷編2005 『人文科学ハンドブック』東北大学出版会、193頁

を参照)、私は大学院の途中で社会科学に転じ、環 境や不公平などに関する社会意識の分析や、個人 の意思決定と社会的決定との関係についての理論 分析に携わってきた。授業では、そのような問題を通 して、受講者の皆さんが感性豊かな論理的思考 力を身につけるのを援助したいと思っている。

以下に選んだ6冊は、必ずしも私の専門分野(社 会意識の数理・計量社会学)の本ではない。社会科学 者としての私の進路を決定付けた専門書は、個人 的には重要な本だが、ここで紹介しても、ほとんど意 味がない。授業の中で紹介する本は、シラバスを見 ればよい。また、専門分野を離れた本であっても、高 村薫『太陽を曳く馬』(新潮社、2009年)のような新 刊書や立花隆+立花ゼミ『二十歳のころ』(新潮文庫、 2002年)のような学生の目に付きやすい本、『方丈 記』のような誰でも知っている本(私は、海外出張の ときに携えていくことが多い)は除いた。こうして選 ばれた本は、君の専門分野が何であろうと読むこと ができ、しかも、君の精神を鍛えしなやかにしてくれ だろう。じっさい、過半の本は、私が理科系の学生・ 院生だった頃に読み、その後も折に触れて頁を繰り、 今なお、敬意と愛着を抱いている本である。大学入 学以後の私を支え・慰め・励ましてくれた本でもある。(2010年2月)



プラトン 著  
国家(上・下)

藤沢 令夫 訳、岩波文庫、1979年、原著BC4世紀

ギリシャ時代の哲学書など難しそうだし、国家の ことなど自分には関係ない、と君は思うかもしれない。しかし、君が実際にこの本を読み始めるなら、それが2つとも誤りであることに気づくはずだ。

第一に『国家』は読みやすく面白い。プラトンの



桑原 万寿太郎 著  
動物の体内時計

岩波新書、1966年(絶版)

ミツバチは時間感覚を持っているのだろうか。あ る日、研究者の食卓にあるママレードに、一匹のミ ツバチが訪れた。やがて、多くのハチが食卓を訪れ るようになった。彼が毎日同じ時間に朝食を食べて いると、ハチたちはその時間帯には来るが、他の時

師ソクラテスを中心とした対話が続く中で、しばしば どんでん返しが起こる。「なるほど、そうだ」と思っ ていると、実はその考えに問題があることが述べら れる。そのようにして、探求が深まりを見せる。そ の「劇」を見ながら、あるいはそれに参加しながら、 読者の思索は深められ、知的しなやかさが養われる。

第二に、この本は君のための本でもある。なぜ なら、副題「正義について」が示唆するように、こ の本は、正義の意味を探求し、幸福との関係を論じ ているからだ。そしてそれは、これまでの自分から 脱皮して新しい精神をもった自己を構築し直す時機 にある君が、正に考えるべき問題だからだ。しかも、 それなくしては、友人関係も部活動も長続きしない。 社会の基本問題でもある。この本は、社会の中に 生きる自我を確立しようとする君にとって、不可欠 な本になるだろう。

アリストテレス『ニコマコス倫理学』(岩波文庫) は、この問題を、さらに体系的に論じている。

間帯にはほとんど訪れない。試みに5日目にはママ レードを出さなかったが、朝食時刻になると大勢の ハチが来た。

しかし、これだけでは、ミツバチが時間感覚を持っ ている証拠にはならない。同じ現象が、他の理由に よって生じる可能性もあるからだ。こうして研究は 始まり、ミツバチのコミュニケーションとそれを支える 体内時計の機構が明らかにされていく。

この本は、かなり古い本であり、書かれている個々 の事実については、その後の修正があるかもしれない。しかし、新たな観察や実験とともに科学的発見 が次々になされていく過程と、それを生み出す科学的 探究の精神は鮮やかだ。学生諸君には是非、その 醍醐味を味わい身につけて欲しい、と私は思う。

科学的探究について記し同じような感動をもたら してくれた本には、同じ著者による『動物と太陽コ ンパス』、東北大学教授だった栗原康による『有限 の生態学』など、多くの良書がある。



木下 順二 著

## 風浪

『風浪・蛙昇天』木下順二戯曲選Ⅰ、岩波文庫、1982年、原著1962年

現代の日本社会は明治初期や第二次世界大戦後と並ぶ激動期にある、と言われる。その中で青年期を迎えた君にとって、明治初期の熊本を舞台としたこの戯曲は、共感とともに読むことができるだろう。社会の変動期には、次の社会を形成するさまざま

まな思想が提唱される。明治初期の熊本では、横井小楠を師と仰ぐ実学党、朱子学に依る学校党、神道系の敬神党などが並立し、それぞれの思想によって新しい社会を創造しようとしていた。さらに、キリスト教も入ってきた。このような社会状況の中で、志を持つ青年たちは、それぞれの道を追求する。

しかし、主人公・佐山健次は、どの思想にも共感する面を見出しながら、どの一つにも入り込めない。神風連事件前後の激動期に生きる佐山の葛藤を中心テーマとして、この戯曲は展開する。

大学生となり、これまでの自分から人間的・思想的に脱皮する時機を迎えた君にとって、佐山の葛藤は他人事ではない。

木下順二は、『夕鶴』などの民話劇作家である以上に現代劇作家である。『風浪』を読んだ後は、第二次世界大戦中のスパイ事件を題材にした『オットーと呼ばれる日本人』や戦後の極東軍事裁判をめぐる『神と人との間』など、多くの作品に進んで欲しい。



井上 ひさし 著

## 吉里吉里人 (上・中・下)

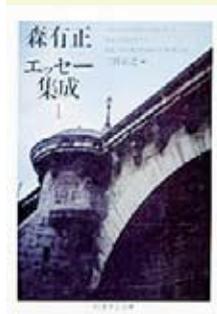
新潮文庫、1985年、原著1981年

読み方によっては、荒唐無稽な娯楽小説である。売れない小説家・古橋健二が、取材のために東北本線で一関付近を北上中に、吉里吉里国の独立運動に巻き込まれ、ひょんなことから大統領にまでなってしまう。この間に生じる種々の出来事が、

『ひょっこりひょうたん島』の作者によって描かれている。寝転がって笑いながら読むことができる。

しかし、この小説は、それ以上に思想小説である。吉里吉里村は、面積40平方キロ弱、人口4千人余の小さな村に過ぎない。しかし、食料は自給可能であり、先進的医療技術を誇る病院を経営し、行政は極端に簡素化され、金本位制度の導入によって国際企業からも支持を得ており、日本国からの独立が法的にも経済的にも可能である。そこで、この小さな村は、自分たちの理想の実現を目指し、日本国から独立しようとする。周到な準備を経て始まったその運動は、しかしながら、独立を阻もうとする日本国の力によって潰されていく。その過程を見る中で、我々が日ごろ当たり前だと思っている物事が、次々に俎上に載せられていく。

この小説は、固定観念に縛られがちな我々の思考を解放し、自由な精神に導いてくれる。高橋和己『邪宗門』とは対照的なユートピア小説である。



森 有正 著

## バビロンの流れのほとりにて

『森有正エッセー集成Ⅰ』ちくま学芸文庫、1999年、原著1957年

東京大学文学部助教授だった森有正は、1950年、船でフランスに旅立つ。40歳を前にしての渡仏だった。そして、その3年後、一連の思索を、次のような文で始めた。——「一つの生涯というものは、その過程を営む、生命の稚い日に、すでに、

その本質において、残るところなく、露れているのではないだろうか。」

当初は数年のつもりだった森有正のフランス滞在は、結局、彼の死まで続き、この書簡体の文章もまた、彼の生涯に渡って綴られることになって、彼の思想を今に伝えてくれる。ここには、初代文部大臣・森有礼の孫であり、キリスト教の牧師の子として生まれ、フランスの修道会が設立した小中学校で学び、デカルトやパスカルの研究者として研鑽を積んだ森有正が、フランス文化（あるいは、西欧の精神）と格闘せざるを得なかった過程が書き留められている。そこに描かれるのは、凡百の旅行記や紹介文が描くフランスとはまったく異質の、深く硬質な世界である。

この本に私が出会ったのは、1968年、日ごとに変わる喧騒の中で、しかもなお静かに深く考えることを教えてくれた本であった。

森有正は晩年、『生きることと考えること』（講談社現代新書）などの親しみやすい本も残している。



加藤 周一 著

## 読書術

岩波現代文庫、2000年、初版1962年

どうい本を読んだらよいかについては論じようがないが、どう読んだらよいかは一般論として論じられる。著者はそう考え、自らの読書術を公開する。

その技術は多面的である。急がば回れ、古典を味わう精読術。新刊を数でこなす速読術。臨機応変、

読まずにすまず読書術。原著に挑み、原語に触れる解読術。新聞・雑誌の看破術。難解な本をとりこむ読破術。それぞれが、豊富な例示とともに語られる。

中でも私が気に入ったのは、最終章「難しい本の読破術」である。この章は、いきなり、「わからない本は読まないこと」という助言で始まる。第一に、難しい本の大部分は、文章が下手か、著者が自分の言うことを十分に理解していないかである。第二に、立派な本の中にもある難しい本の場合には、分からない理由が読者の側にある。その種の本の理解には、単語の意味の正確な理解だけでなく、著者の経験とほとんど同種の経験を持っていないと、ならない、という。この主張には一瞬たじろぐが、「私にとってむずかしい本は私にとって必要でなく、私にとって必要な本は私にとってかならずやさしい」という言葉に力づけられる。

医学から出発して東西の文化を論じた当代随一の知性・加藤周一の言葉だけに、傾聴の価値がある。

## ■ 本誌の書籍紹介一覧

書籍名	著者 翻訳	発行年 (原書)
アメリカのデモクラシー (第1巻上・下、第2巻上・下)	トクヴィル著 松本礼二訳	第1巻 (2005年) 第2巻 (2008年)
野生の思考	クロード・レヴィ=ストロース著 大橋保夫訳	2006年 (1976年)
野生の科学	中沢新一著	2012年
日本辺境論	内田樹著	2009年
日本の未来について話そう —日本再生への提言—	マッキンゼー・アンド・カンパニー責任編集/グレイ・チャンドラー/エアン・ショー/ブライアン・ソースバーグ編	2011年
キッシンジャー回想録 中国 (上・下)	ヘンリー・A・キッシンジャー著 塚越敏彦/松下文男/横山司/岩瀬彰/中川潔訳	2012年
英語とわたし	岩波書店編集部編	2000年
翻訳の秘訣：理論と実践	中村保男著	1982年
英語の感覚・日本語の感覚： ＜ことばの意味＞のしくみ	池上嘉彦著	2006年
日本語教室	井上ひさし著	2011年
ことばと文化	鈴木孝夫著	1973年
日本の文化構造	中西進著	2010年
植物が地球をかえた！	葛西奈津子著	2007年
生命と地球の歴史	丸山茂徳/磯崎行雄著	1998年
光合成とはなにか —生命システムを支えるカー	園池公毅著	2008年
光合成の科学	東京大学光合成教育研究会編	2007年
植物の私生活	デービッド・アッテンボロー著 門田祐一監訳、手塚勲/小堀民恵訳	1998年
100億人への食糧 —人口増加と食糧生産の知恵—	L・T・エヴァンス著 日向康吉訳	2006年
風土 —人間学的考察—	和辻哲郎著	1991年 (1935年)
農業の基本価値	大内力著	2008年 (1990年)
世界を不幸にしたグローバリズムの正体	ジョセフ・E・スティグリッツ著 鈴木主悦訳	2002年
ショック・ドクトリン (上・下) —惨事便乗型資本主義の正体を暴く—	ナオミ・クライン著 幾島幸子/村上由見子訳	2011年
貧困のない世界を創る —ソーシャルビジネスと新しい資本主義—	ムハマド・ユヌス著 猪熊弘子訳	2008年
新・環境倫理学のすすめ	加藤尚武著	2005年
人類の足跡10万年全史	スティーヴン・オッペンハイマー著 仲村明子訳	2007年 (2004年)
数学をつくった人びと I、II、III	E・T・ベル著 田中勇/銀林浩訳	2003年 (1937年)

	出版社	シリーズ	版 型	ページ	定 価
	岩波書店	岩波文庫	文庫	第1巻上364p/下480p 第2巻上282p/下327p	第1巻上900円+税/下1040円+税 第2巻上780円+税/下 840円+税
	みすず書房		A5	408p	4800円+税
	講談社		四六判	480p	2200円+税
	新潮社	新潮新書	新書	255p	740円+税
	小学館		四六判	416p	1900円+税
	岩波書店		四六判	上342p/下342p	上2800円+税/下2800円+税
	岩波書店	岩波新書	新書	228p	品切重版未定
	新潮社	新潮選書	B6	247p	絶版重版未定
	NHK 出版	NHK ブックス	B6	256p	970円+税
	新潮社	新潮新書	新書	186p	680円+税
	岩波書店	岩波新書	新書	209p	720円+税
	岩波書店		四六判	386p	3600円+税
	化学同人	植物まるかじり 叢書	四六判	160p	1200円+税
	岩波書店	岩波新書	新書	282p	840円+税
	講談社	ブルーバックス	新書	261p	940円+税
	東京大学出版会		A5	304p	3800円+税
	山と溪谷社		B5変型	320p	3200円+税
	学会出版センター		A5	290p	3800円+税
	岩波書店	岩波文庫	文庫	299p	900円+税
	創森社		四六判	216p	1600円+税
	徳間書店		四六判	390p	1800円+税
	岩波書店		四六判	上402p/下406p	2500円+税 2500円+税
	早川書房		四六判	382p	2100円+税
	丸善出版	丸善 ライブラリー	新書	228p	780円+税
	草思社		四六判	416p	2400円+税
	早川書房	ハヤカワ文庫	文庫	I : 421p / II : 421p / III : 392p	各820円+税

書籍名	著者 翻訳	発行年 (原書)
素数の音楽	マーカス・デュ・ソートイ著 富永星訳	2005年 (2003年)
ガン回廊の朝 (あした) (上・下)	柳田邦男著	1981年 (1979年)
石巻赤十字病院の100日間 —東日本大震災 医師・看護師・病院職員たちの苦闘の記録—	石巻赤十字病院著、由井りょう子文	2011年
津波と原発	佐野眞一著	2011年
物理学はいかに創られたか (上・下)	アインシュタイン/インフェルト著 石原純訳	1963年 (上1939年/下1940年)
科学と仮説	ポアンカレ著 河野伊三郎訳	1938年
寺田寅彦随筆集第二巻 [全5冊]	寺田寅彦著 小宮豊隆編	1993年 (1947年)
目に見えないもの	湯川秀樹著	1976年
二重らせん —DNAの構造を発見した科学者の記録—	ジェームズ・D・ワトソン著 江上不二夫/中村桂子訳	2012年 (1968年)
おはなし電気学	佐野昌一著	1939年 (絶版)
職業としての政治	マックス・ウェーバー著 脇圭平訳	1980年 (1919年)
社会科学における人間	大塚久雄著	1977年
プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神	マックス・ウェーバー著 大塚久雄訳	1989年 (1920年)
近代の政治思想 —その現代的・理論的諸前提—	福田歓一著	1970年
忠誠と反逆 —転形期日本の精神史的位相—	丸山眞男著	1998年
書書周游 [萩原延壽集5]	萩原延壽著	2008年
理科系の作文技術	木下是雄著	1981年
ゾウの時間ネズミの時間 —サイズの生物学—	本川達雄著	1992年
森と文明の物語—環境考古学は語る	安田喜憲著	1995年
奇蹟の器—デルフトのフェルメール—	千葉成夫著	1994年
地球の食卓 —世界24か国の家族のごはん—	ピーター・メンツェル/フェイス・ダルージオ著 みつじまちこ訳	2006年
人間と環境のコミュニケーション農学 —社の都からの発信—	東北大学農学部「農学ビジョン懇談会」編	1997年
国家 (上・下)	プラトン著 藤沢令夫訳	1979年 (BC4世紀)
動物の体内時計	桑原万寿太郎著	1966年 (絶版)
風浪【木下順二戯曲選1 より】	木下順二著	1982年 (1962年)
吉里吉里人 (上・中・下)	井上ひさし著	1985年 (1981年)
バビロンの流れのほとりにて 【森有正エッセー集成1 より】	森有正著	1999年 (1957年)
読書術	加藤周一著	2000年 (1962年)

出版社	シリーズ	版 型	ページ	定 価
新潮社	新潮クレスト・ブックス	四六判 変型	478p	2400円+税
講談社	講談社文庫	文庫	上329p/下321p	各571円+税
小学館		四六判	228p	1500円+税
講談社		四六判	254p	1500円+税
岩波書店	岩波新書	新書	上177p/下194p	700円+税 740円+税
岩波書店	岩波文庫	文庫	296p	700円+税
岩波書店	岩波文庫	文庫	316p	660円+税
講談社	講談社学術文庫	文庫	164p	660円+税
講談社	ブルーバックス	新書	245p	900円+税
明治書院	科学知識普及會	四六判	486p	—
岩波書店	岩波文庫	文庫	121p	480円+税
岩波書店	岩波新書	新書	226p	760円+税
岩波書店	岩波文庫	文庫	436p	1000円+税
岩波書店	岩波新書	新書	201p	700円+税
筑摩書房	ちくま学芸文庫	文庫	512p	1400円+税
朝日新聞出版		四六判	336p	2600円+税
中央公論新社	中公新書	新書	256p	700円+税
中央公論新社	中公新書	新書	240p	680円+税
筑摩書房	ちくま新書	新書	208p	660円+税
五柳書院	五柳叢書	四六判	240p	2427円+税
TOTO 出版		224× 304mm	288P	2800円+税
農林統計協会		B5	124p	2400円+税
岩波書店	岩波文庫	文庫	上456p/下493p	1000円+税 1040円+税
岩波書店	岩波新書	新書	201p	—
岩波書店	岩波文庫	文庫	339p	700円+税
新潮社	新潮文庫	文庫	上501p/中502p /下520p	各710円+税
筑摩書房	ちくま学芸文庫	文庫	576p	1500円+税
岩波書店	岩波現代文庫	文庫	232p	960円+税